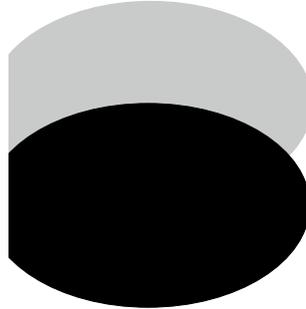


20111017

絵本学会 NEWS No.43

発行：絵本学会
発行日：2011年10月17日
編集：絵本学会広報委員会
絵本学会事務局：〒567-8578 茨木市宿久庄2-19-5
梅花女子大学児童文学科 香曾我部秀幸研究室内
E-mail:ehon-g@baika.ac.jp
<http://www.u-gakugei.ac.jp/ehon/index.html>



絵本学会

第14回絵本学会大会報告
講演 曼荼羅の色と形～その意義を探る～
シンポジウム 絵と語り
研究発表・作品発表
ラウンドテーブル
絵本学会第14回定期総会報告
決算報告・予算
各委員会から
事務局からのお知らせ
むにゃむにゃ日記 あおきひろえ
お知らせ—絵本関連展覧会

第14回絵本学会大会報告

第14回絵本学会大会実行委員長 シャウマン ヴェルナー

大会実行委員 石井光恵 伊藤淑子 今田由香 甲斐聖子 永田桂子 森覚

第14回絵本学会大会は、2011年6月11日(土)、12日(日)の両日にわたり、東京豊島区にある大正大学を会場として開催された。大正大学は、1926年に創設された仏教連合大学である。本大会は、仏教系の大学を舞台とする絵本学会ということで、「絵解き・絵巻・曼荼羅と絵本」というテーマを掲げ、仏教絵本という多くの方には耳慣れないジャンルを扱った初の試みであった。上記テーマに因む講演1本、特別企画の実演1本、シンポジウム1本、ラウンドテーブル3本、研究発表15本(うち3本が仏教絵本関係)、絵本作品発表10本という構成となり、加えて、大正大学所蔵の国宝級を含む仏教美術作品の展示会が附属図書館に置いて並行して行われた。また「絵本ブックフェア」に、仏教関係の出版社が参加したことも含め、特色ある学会になったのではないかと自負している。

参加者は、会員が114名、一般参加者が133名、学生参加者が21名、大会サポートの学生スタッフが23名であった。学会開催にあたっては、関係学部の教職員・学生諸君はもとより、大学各方面から多大なご支援・ご協力を頂いたことに、実行委員長として心から感謝申し上げたい。

大会第1日

開会式に続き、大正大学元学長で、現仏教学部教授小峰彌彦氏による「曼荼羅の色と形～その意義を探る～」という講演が行われた。小峰氏は初期大乘仏教・曼荼羅思想研究家である。曼荼羅とは、仏教の教理を言葉に抛らず色彩と形で伝えようとするものである。だが普通の日本人には馴染みの薄いものではあり、しかもそれが絵本とどう繋がるのか。一見、突飛で不可解に思えるテーマであったが、しかし逆にその故か、非常に多くの聴衆が集まり、分かり易い解説に熱心に耳を傾け、美しい画像に見入った。

続いての特別企画、新潟県長岡市の住職で画家の諸橋精光氏によ

る、大型紙芝居の実演は、さらに多くの聴衆を集めた。氏は、布教活動の一環として、ここ十数年、大型の紙芝居制作と実演に力を入れている。会場では三つの作品が披露された。「小僧さんの地獄めぐり」は、江戸時代の地獄絵をベースに、日本人の心底に眠る地獄のイメージを用いて、畳一枚ほどの大きな画面に力強く描き出された、超大型紙芝居である。右手和子氏による朗読、新潟ひょうし木の会のメンバーによる太鼓やほら貝、木魚などによる演奏の応援も加わった上演の迫りに会場は圧倒された。二つ目、芥川の「くもの糸」も地獄のイメージが用いられた作品で、多くの絵本で知られると同時に、お寺で法話として語られることも多い。それが諸橋氏による美しい大型の絵となり、紙芝居となって、絶妙なタイミングで目前の絵がさっと引き抜かれて次の画面が登場する形で物語が展開することによって、お話は絵本とは異なるダイナミズム、新たな命を獲得していた。三つ目の斎藤隆介作の「モチモチの木」は誰もが知る童話であり、滝平二郎による絵本が特に有名であるが、諸橋氏は敢えてこの絵本を見ずに、仏教的解釈も可能な話として独自の画面を作り上げている。これを見ることによって、絵本と紙芝居では表現の方法が異なることが一般参加者にもよく理解できたと思う。

以上、大正大学礼拝堂(「らいはいどう」)において行われた催しに続いては、三つの会場に分かれての研究発表会が開催され、A会場では理論的取り組み、B会場では実践的な試みについてそれぞれ熱心な議論がなされた。C会場では、例年通り、幼児教育に関わる会員による保育と絵本の関係についての発表と議論が行われた。

研究会終了後は、再び礼拝堂に会場を移して総会が行われ、続いて、8階の見晴らしの良い会場で「交流会」が行われたが、ここ

には、関東・東北大地震の被災地支援の意味を込めて東北のお酒が用意され、学会メンバーのほか、紙芝居上演者や、来年度の開催地紹介のために九州から上京された方々の参加も得て、賑やかに和やかに歓談がなされた。

大会 2日目

9時から2つの会場で作品発表会が開催された。大正大学は美術系の大学ではないため、設備面で不足もあったと思われるが、大方は満足して頂けたであろうことを希望する。続いて、2つの会場に分かれて研究発表会が行われ、A会場では仏教というテーマに様々な意味で関わる絵本研究が、B会場では絵本読み聞かせの実践に関わる研究が発表された。

午後は「絵と語り」というテーマでシンポジウムが行われた。パネラーの一人は第1日目にもご登場願った、住職であり同時に絵本作家・絵本紙芝居作家である諸橋精光氏、もう一人は大学や児童館で制作の指導にあたる教師であり同時に映像作家である屋間行雄氏の二人。前者は画像を通じての仏教の布教を主たる制作動機とするのに対し、後者は芸術表現としてのフォルムを迫及する立場であって、コーディネーターとしては、ひょっとして議論が噛み合わないのではないかと密かに心配していたが、そんな危惧は不要であった。両氏は立場の差を踏まえた上で、よく互いの話を理解し議論を交わしたため、聴衆にも絵本、紙芝居、アニメの共通点や差異が良く分かり、質問がいくつも出てよい議論になった。

三つのラウンドテーブルの一つ目は、横浜美術大学の宮崎詞美氏の司会のもと、京都造形芸術大学の佐藤博一氏と、美術系の大学ではない大正大学においてインストラクターという立場で教鞭をとる芸術家小林史子氏が、「大学教育の中の絵本づくり」というテーマで、そのあり方と意義について議論を試みた。二つ目は、絵本学会の恒常的なテーマと言ってよい絵本の編集をめぐるの議論で、梅光学院大学の村中李衣氏の司会のもと、共にフリーの編集者である細江幸世、澤田精一の両氏が語りあった。三つ目のラウンドテーブルでは再び仏教に関わるテーマが取り上げられ、絵本学会会長である文教大学教授中川素子氏がコーディネーターを務めた。絵本作家の小林敏也氏と近代文学研究家で都留大学名誉

教授の関口安義氏が「宮沢賢治と芥川龍之介—絵本に見る祈りと影—」というテーマで講演と対談を行った。

ラウンドテーブル終了後、閉会式が行われ、中川会長の閉会宣言をもって、二日にわたる絵本学会を無事、終了した。大正大学も昨今は週末も大学校舎がさまざまに利用されているため、土曜日は授業が、日曜日は他の民間会社の試験などが並行して行われている状況であったので、大会運営への影響も心配されたが、関係者、特に大正大学の若い学生たちの協力によって、大きな問題もなくスムーズに会の運営が出来たことには、実行委員長として再度、心からの感謝を申し述べたい。もうひとつ、特別の感謝を捧げたいのは、諸橋氏が、氏の作品の中から、会議プログラムの背景画像を提供して下さったことである。会期中、アルバイト学生が着用しており、参加者の目にも大いに留まったに違いない黄色いTシャツの背中の閻魔大王の図柄も、諸橋氏のご好意による提供であったことを申し添えておきたい。

「ケチなシュヴァーベン人」ぶりが発揮された采配の結果、会計が黒字になったことを喜んでいる。残金は東日本大震災の義援金に充てることを提案したいと思う。（シャウマン ヴェルナー）



講演

曼荼羅の色と形～その意義を探る～

講師 小峰彌彦

大正大学教授

司会 伊藤淑子

大正大学

「曼荼羅の色と形～その意義を探る～」と題して、大正大学教授であり、元学長である小峰彌彦先生による講演が行われた。絵本学会でなぜ曼荼羅なのか、と疑問に思われた方も多かったかもしれないが、講演が進むにつれて、曼荼羅と絵本の文化的な役割に大きな共通点があることが明らかになり、日本の仏教の伝統のなかにある原理が、絵本というメディアにも活かされていることを確認することができた。仏教、とくに真言密教の教理についても、曼荼羅を用いてわかりやすく説明していただいた。仏教の教理内容についてはいささか不安であるものの、司会を務めながら把握した講演内容を報告させていただく。

●曼荼羅のはたらき

日本は憲法によって信仰の自由を保障された国であるが、実際に遂行されている宗教的慣習の現状からみても、仏教を中心に構築された社会システムをもつことに疑問の余地はあるまい。仏壇を祭り、彼岸や盆に墓参をし、仏像に手を合わせるという日常的な行為によって、仏教は日本の生活に浸透している。

しかしながら、日常化した仏教の作法に従いながら、一般の人びとにとって、仏教はどのような教理をもち、数ある仏たちがどのような意味をもつものであるのか、ということは明解であるとはいえない。大正大学の建学の精神は「慈悲と智慧」であるが、仏教はいつも慈しみ深い姿をしているわけではない。慈悲に満ちた仏であるはずの仏像が大きく目を見開き、口を開けて威嚇し、手を振り上げて、いまにも襲いかかってきそうな様相をしていることに、とまどった経験はないだろうか。何組もの手を有し、四方に顔をもつ仏像はファンタジーですらある。

そうなのである。仏教の教えには表面的には矛盾がたくさんある。表情のリアリズムとは裏腹に、仏の姿は人間を映し出したものでもない。一般の人間にとって、仏教は迷路のような、迷宮のような場所ですらある。

しかしそのイメージとは裏腹に、仏教はきわめて整然とした秩序をもち、仏教ほど理路整然とした教理によって成り立つ宗教は他にないと小峰彌彦先生は断言する。仏教のコスモスはいっさいの矛盾をはらまず、あらゆるバランスのうちに存在するというのである。

そうだとすると、その秩序を理解し、仏教の教理を内面的に理解することは、一般の人びとにとって容易なことではない。修行を積む僧侶でなければ、仏教は謎めいた姿のままである。仏教の教理を理論的に説くには、膨大な言葉が必要である。それを言葉によって仏教の体系を体得するには、長大な時間が必要である。

それを一目でわかるようにしたのが曼荼羅なのである。仏教の全体像を感覚的につかみ、図を見ながら、なぜそのような成り立ちをしているのかを仏教者から解説を受ければ、仏教を理論と専門的な

言葉によって修めた者でなくても「なるほど」とうなずくことができるようにしたのが曼荼羅である。

●曼荼羅と絵本

ここに絵本との共通点を見出すことは困難なことではない。幼い子どもは自分の置かれた小さな環境から次第に世界や宇宙の成り立ちへと関心を広げていく。身の回りに存在する道具や物、草木や花、昆虫や鳥、身近な小動物や動物園にいる生きものたち、電車や車などの乗り物、太陽に月、空に浮かぶ雲や夜空の星、それらの一つひとつの関係性と意味を自分の経験だけで理解することはとてつもなく大きなチャレンジである。だからこそ絵本は幼児にとって世界を疑似体験する有効なメディアでありうる。人間とは何か、人間の生活はどのように成り立つのか、世界は何か、宇宙は何か、生命とは何か、幼児は成長につれ、これらの疑問に対峙し、そして答えのない問いを自分なりに折り合いをつけて自分自身と外的な世界を受容する。その過程を助けるのが絵本であるといえるだろう。絵によって、物語によって、絵本は世界や宇宙、生命のあり様を示すといえる。絵本が担う伝達は、言葉と論理によるならば何巻ものボリュームを要するものであるのかもしれない。

感覚的な伝達を近代的な価値観は重要視してこなかったといえる。絵本は子どものための文化とみなされ、大人の鑑賞に堪えるものではないとされてきた。すくなくとも大学のカリキュラムにおいて、アカデミズムのディシプリンにおいて、絵本の「絵」も「文字」も正当に扱われてきたとはいえない。

仏教の教理を絵で伝えようとする曼荼羅にも、そのことはあてはまる。仏教はインドにはじまりアジア各地で独自の発展をし、信仰を広めてきたが、その過程で経典が編まれ、知識は特別な修行や知的訓練を受けた僧侶が階級的に独占するようになると、仏教のまた感覚的理解をはなれ、論理的言語によって取り囲まれる。その証として、アジアの大部分の仏教は曼荼羅という表現方法を捨てて久しい。

日本の仏教が曼荼羅の伝統と技法を維持し、伝えようとしていることは、長い仏教の歴史において誇りとすべきことであろう。絵によって伝えられる情報は文字をはるかに凌駕する。仏教は像も絵も、偶像であると否定することはなかったが、ここにこそ仏教文化の豊かさがあることは、ポストモダンを生きる私たちにとっても重要なことであろう。そこに示唆される絵本の可能性も看過できない。

●曼荼羅が描く教理

講演では曼荼羅の画像をスライドに写しながら解説が行われたが、緻密な図、鮮やかな色彩は目を奪った。美しさもまた、意味の伝達における重要な要素である。人の目を引き付けてこそ、そこに込められた意味が伝わる環境ができる。

曼荼羅の特徴は組織的に構築された絵にある。日常言語をいっさい用いず、多彩な色と形で仏教の教理体系を表現しようとする試みであり、祈りの対象である。見る側の豊かな想像力をかきたて、言語以上のことを伝えることができるのが曼荼羅である。

曼荼羅には金剛界曼荼羅、大悲胎藏生曼荼羅の両部曼荼羅、別



尊曼荼羅などがあるが、この回の講演では胎蔵曼荼羅を中心に、真言密教の教理に基づいて、曼荼羅が宗教体験の目標をどのように図絵で描いているかということが解説された。

胎蔵曼荼羅は仏教が宇宙をどのように見るかということが示されている。胎蔵曼荼羅の中心にあるのは「中台八葉院」で、その中央に描かれるのが大日如来である。仏教の教理を総合した形として表わされる大日如来は、命、宇宙の根源を意味する。色と形は「蓮華」すなわち「清浄心」と、「心臓」すなわち「核心」を象徴する。大日如来のまわりには如来と菩薩が描かれるが、これらの四仏・四菩薩は「理想の世界＝果」と「現実世界＝因」を表わし、「自利」と「利他」を表現する。菩薩の四種の階位は誰でもなることのできる「初発意菩薩」、継続することによって可能になる「久発意菩薩」、僧侶に値する「不退転菩薩」、そして架空の境地としての「一生補処菩薩」を表す。

中台八葉院の周りには初重が配される。上部に遍知院、左手に蓮華部院、右手に金剛手院、下部に持明院となる。初重で描かれるのは観念の世界であり、遍知院は慈悲と智慧は仏教的な女性原理と男性原理を表現する。蓮華部院は慈悲の多様性と深さ、金剛手院は智慧の豊かさや強さ、持明院は勇猛果敢に煩惱に立ち向かう実行力を表わしている。持明院に描かれる明王が恐ろしいのは、必死の形相で、どのような煩惱にもひるまないことを示しているからである。それは人のために働くゆるぎない決意であり、威嚇ではない。病気に治療は必要であると同様、仏教において煩惱は合理的に対処することが必要な問題であり、それに効を奏するのが法門である。

初重の周りには第二重が描かれる。初重が観念を描いたものであるのに対し、第二重は現象世界への展開を映し出したものである。大日如来は宇宙そのもの、ひとつの生命体であり、人はそのなかで生かされるのであるが、その原理を伝えるために、大日如来の宇宙から生み出された宝物が釈迦である。釈迦がさまざまな英知に恵まれていたこと

は間違いないが、数多くの弟子を集め、その弟子たちによって広く仏教が布教されたことの最も重要な要因は釈迦の社会性であるといえる。社会性を有する釈迦であったからこそ、利他業を弟子たちに伝え、仏教の精神を伝えることに成功したのである。

そして第二重の周囲を第三重である最外院が取り囲む。最外院は広く世界に仏教精神が広がっていくことを表わしている。命と宇宙の源である大日如来が、四仏と四菩薩という観念的世界の構造を成立させ、釈迦の働きを通して現象となり、そして仏教精神が人びとにくまなく広がっていくのである。

●曼荼羅と絵本の可能性

科学が発達した今日においても、いや、科学が発達した今日であるからこそ、私たちは科学では説明のつかないことのあることを認識せざるをえない。命とは何か、魂とは何か、世界とは何か、宇宙とは何か、これらの問いに万人を納得させることのできる明確な答えを出せる理論は存在しない。それでも私たちはその現実を受け入れて生かされていく。

小峰先生は講演の最後を「『思議』を超えるもののことを『不思議』というのです」という言葉で締めくくられた。幼い子どもが絵本の絵を指さしながら「これはなあに」と素直に不思議に直面し、そのあり様を受けとめていくのと同様に、私たちが飲み込まれてしまいそうな宇宙をまえに、虚心に曼荼羅を見つめ、その原理に支えられてもいいのかもしれない。仏教徒であろうとならうと、そこにはきっと私たちの生の営みへの励ましがあるのではないだろうか。仏教教理を体系的に描く曼荼羅を絵本とまったく同質のものであるということではできないが、不思議を思議、つまり言葉と論理で封じ込めることをあきらめたところに、逆説的ではあるが宇宙や命のワンダーを力強く伝える道が拓けてくること、そのことにおいて絵本の可能性はまだこれからも様々に開かれていくことを実感することができた。(伊藤淑子)



シンポジウム

絵と語り

パネラー 諸橋精光

絵本・紙芝居作家

パネラー 昼間行雄

映像作家

司会 シャウマン・ヴェルナー

大正大学

なぜ人は語るのか。絵や映像をもって語るとはどのようなことか、絵や映像と語りの関わりとはどんなものか？「仏教絵本」を中心テーマに行われている今回の「絵本学会」の、このシンポジウムの根底にも、やはりそうした基本的な問いがあります。

今日のお一方、僧侶として絵本制作と大型紙芝居を演じて布教をされる諸橋精光先生には、昨日、すでに、見事な紙芝居を見せて頂きました。もうお一方の昼間行雄先生は、「子どもの城」という児童施設で、簡単なアニメ制作を通して自己表現させるという形で長く子どもに関わって来られ、今は美術大学で大学生にアニメ制作の手法を教えておられます。

まず、お二方に 30分ずつ、ご講演を頂き、そのあと、お二人で対談をして頂きたいと思います。よろしくお願いたします。

諸橋：僕は新潟県の真言宗の寺に生まれました。絵描きになりたくて美術の学校に進みましたが、跡を継ぐため大正大学で仏教を学ぶうちに仏教のおもしろさが目が開かれました。『仏教説話体系』全 40巻は実に無尽蔵の物語の鉱脈です。これを絵本にしたらどうだろう、仏教の背後にある因果応報世界を浮き上がらせることが出来るかもしれない、毎月1冊、30年かけて、計300冊ほど描きました。

寺で8月に「子供祭り」を始めることにし、初回は200人くらい集まりました。2年目はメイン・イベントが欲しいと思い、絵で仏教を伝える工夫をしました。まずはベニヤ板十枚ほどのパネルに地獄絵を描いて絵解きをすることを考えました。しかしそんな大きなものは扱いが不便です。そこでそれをばらばらに解体し、順にめくる紙芝居を思いつき、絵本「地獄」を下敷きに大型紙芝居を制作しました。そしてただ語るだけでなく、お寺にある鳴り物を使った効果音を入れて演じてみました。するとまるで絵が動き出すようで、作品世界が150%にも200%にも広がるような面白さです。子どもも大人も夢中になって見てくれます。シンプルな形式ながら人の心を引き付けるこの表現手段に制作者としても夢中になり、地獄絵に続いて、「くもの糸」、「なめとこやまのくま」など、毎年1点、新しい作品を作って来ました。起伏のある、スケールの大きい物語が大型紙芝居には適しています。20から30場面を全体を構成するのですが、面白い事に、初めからずんずん、20枚ちょっと描いて来ると、そのあたりでようやく物語の「核」が見えて来る。物語が要求する視点、解釈の鍵が見えて来て、あるべき構図、構成の全体が見えて来るのです。『モチモチの木』の場合は21場面まで描いた時、モチモチの木が宇宙の中心であり、母であることに気が付きました。僕にとっては絵を描くことが認識の武器であり、物語解釈の実践的方法であり、仏教の真実に迫る体験なのです。そして、ここまで来ると僕はそれまで絵いた20数枚を思い切って全部捨て、新たに描き直します。すると僕の解釈によって物語が命を得、パワーアップして、人の心により訴えるものに生まれ変わるのです。

昼間：僕は、1985年から「子どもの城」で「アニメーション・ワークショップ」を開き、子どもたちに簡単なアニメによって自分の物語を作ることを教えて来ました。二つの場面を描き、それを



研究発表

研究発表 A 大会 1日目(1031教室)

座長: 三宅興子・今田由香

第1日目A室では、子どもとの関わりにおいて実感したことを出発点とする、4つの研究が発表されました。

鈴木穂波「島田ゆか「バムとケロ」シリーズの「生」の表現—そのインタラクティブ性に迫る—」は、読者の内的欲求に応える「生」の表現が、人気のシリーズ「バムとケロ」にふんだんに盛り込まれていると見て、キャラクターや作品世界を分析した結果の報告でした。色彩、場面割、言葉、そして、表紙や見返しなど絵本のパラテキストにも注目し、読者と絵本の双方向性も明らかにされました。

浅木尚実「ごっこ遊びと絵本—「ちいさなスモールさん」における考察」は、保育園での遊びの観察を起点とする研究であり、事例や、発達心理学と教育学の先行研究を紹介し、ごっこ遊びの発生と発展には、動作の詳細と手順に関する知識、「スクリプト」の獲得と共有が必要であることが示され、そうした「スクリプト」を含む絵本として、「スモールさん」シリーズが紹介されました。

佐々木由美子「『そらいろのたね』における物語の位相—幼児の読みと大人の読み—」は、〈きつね〉、〈そらいろのいえ〉をキーワードに、幼稚園での集団読みにおける発話の採取と、大学生への質問紙調査により、大人と子どもの読みを定性的かつ定量的に比較し、物語受容の違いを考察した結果の報告でした。

正置友子「新宮晋の『いちご』と子どもたちの「読み」について—ヴォルフガング・イーザーの読者理論に拠つつ—」では、文庫活動のなかで、子どもの読みの多様性に触れた発表者が、イーザーらの受容美学を引用しつつ、読者の役割の重要性を論じました。また、『いちご』が、子どもに創造的な読書経験をもたらす様子も少しだけ披露されました。

4つの研究の共通項は、「子ども」、「経験」、「読者」で、この点に参加者は関心を寄せたようです。それぞれの経験的事実に則して、活発な質疑が行われましたが、「読者」と言って何を思うかが、それぞれに違っていたことが印象に残りました。使い慣れた言葉こそ、概念の枠組みを明確にする必要があるようです。会場では、絵本に関する実証的な研究への期待の高まりを感じましたが、事実の抽出と解釈には、研究者の主観が関わっていました。その自覚をどのように示すかなど、実証的な研究を行う際の課題も見えてきました。

●島田ゆか「バムとケロ」シリーズの「生」の表現—そのインタラクティブ性に迫る—

鈴木穂波 (梅花女子大学非常勤講師)

島田ゆかの「バムとケロ」シリーズ(文溪堂)には、居心地のよいものと仲間にも囲まれた箱庭のような世界がみられる。労働や義務はなく、その生活を脅かす敵の存在もない。そこにはユートピアを作り出す徹底した枠組みと工夫がある。小市民的な世界にも取られかねないこの理想の生活は、性別や年齢、人種や家族といった縛り

を超えた、毎日の生活を豊かに楽しく生きることそのものである。作者の島田も、ただ単純に読み手に楽しんで欲しいので、自身の絵本にテーマやメッセージは必要ないとしているが、「ただ単純に楽しむ」ということは、理屈や理解ではない、読み手の心と身体を通しての受け止めへと繋がるものと捉えられる。

つまり、「バムとケロ」の絵本世界は、完成され、閉じられた世界ではなく、想像力が働く隙間を読み手に気づかせ、主体的な働きかけを引き出すという構造をもつ。視覚、聴覚、嗅覚、触覚、味覚などを通して働きかける身体性をもつ表現は、読み手にも身体全体を使って受け止めることを促す。読み手は知覚したものを主体的に構築し、絵本との間にインタラクティブな関係が作り出されていく。この作品は、読み手と居心地のよいものを共有しあう関係性を肯定し、読み手とのインタラクティブな関係を前提とした絵本のひとつの形として位置づけられる。

人間の本質的な部分に触れることのできるものをもつ絵本の特徴を、絵本における「生」の表現と捉え、考察を重ねてきた。この「バムとケロ」シリーズは、娯楽的な楽しみだけをもつ作品と一見捉えられるが、読み手と響きあい、その世界をひらいていく独自の仕組みが見出すことができ、人間の「生」と大変近いところにあると考える。本発表では、シリーズ一作目『バムとケロのにちようび』を中心に、この絵本世界を構築する要素について考察し、絵本の「生」の表現に迫るための一端としたい。

●ごっこ遊びと絵本

浅木 尚実 (淑徳短期大学 教員)

ロイス・レンスキー(Lois Lenski : 1893— 1974) 作 Mr.Small Series(「スモールさん」シリーズ)は、1934年に最初の絵本、The Little Autoが出版されて以来、70年以上も出版され続けているロングセラーである。アメリカオハイオ州で生まれたレンスキーの挿絵を含めた100近い作品の中でも、「スモールさん」シリーズ(8作品)は、同作品が1971年に日本に邦訳されて以来、40年が経過し、2005年には、カラーの新版によってリニューアルされている。ストーリーはいたって単純であるが、スモールさんが車や汽車の運転手、航海士、農夫、消防士、カウボーイそして警察官と幼児の中でも特に男の子があこがれる職業に従事する姿が克明に描かれている。光吉夏弥は、『「ちいさいじどうしゃ」の成功を皮切りに、ミスタースモールは、ヨット、飛行機、消防自動車と、知的な内容をもった一連の乗り物絵本に発展した』と述べている。しかし、乗り物絵本の枠にとどまらないと考えられるのは、このシリーズが、スモールさんがおとなの服装をしているものの、幼児が同化しやすく、特に男の子が夢中で遊ぶ消防士や機関士として設定した結果、幼児期に欠かせないごっこ遊びに発展する要素を秘めていることである。レンスキーの4歳の息子の遊びにヒントを得たとされるこのシリーズであるが、専門的な用語やリアルな仕事内容の描写は、難しく専門的すぎるといった印象を受けるかもしれない。しかし、子どもの絵本だからといって手を抜かない創作態度は、ごっこ遊びに強い影響を与えるものとする。ホイジンガが遊びは人間の本質であることを説いて以来、カイヨワは遊びの一つに模倣遊びを分類し、エリコニンは

ばたばたと交互に見せるだけで、動くお話ができます。1986年からは造形事業部とAV事業部が共同でアニメ体験・映像ワークショップを開催し、いろいろな手法でアニメーションを作っています。どう撮るのか、どう撮りたいのか、効果音も自分で考えます。私達は、子供達が壁にぶつかった時にアドバイスのみにしています。2000年からは、映・造ワークショップを行ってきました。映像と造形を合わせたかたちで、映像の発展の歴史を追体験できるか？というコンセプトのもと、いろいろな体験をしてもらいます。洞窟画を実際に自分達で作ってみたり、ガラスに絵を描いて幻灯をやってみたりしました。2007年でこのクラブ活動は終わりました。というのも、近くに小学校がなくなってしまったからです。現在は、夏休みの二日間で集中的に製作してもらっています。

東京造形大学では、アニメーション専攻の学生に、およそ3か月をひとつのサイクルとして、学生に個人作品を作らせています。マニュアルを与えることはせず、問題にぶつかった時にアドバイスを与える形の指導に留めています。

実習では、ドン・フリーマンの『くまのコールテンくん』という絵本を使い、その映像化を試みさせました。絵本は静止画像です。これをアニメ化するには、どこに注目し、どこをどう動かすか、どこを退いた画面とし、どこをクローズアップするかなどの演出がポイントになります。制作に際しては、自分はこの場面に描かれるものや登場人物の心の動きをどう解釈し、どう映像化したいのか、どの視点を取り、どう表現すれば、自分の考えていることが見る人に伝わるか、よく考える必要があります。ある女子学生は、ボタンが取れ、ワゴン・セールのワゴンの中に投げ入れられているくまの表情、格子の間から見えるくまんと女の子の視線の交差に重点を絞り、ふたりの気持ちの通い合いを見る人に伝えることに成功しました。

司会：ありがとうございました。ところで、絵本、紙芝居、アニメはそれぞれ異なる仕方、絵と物語に関わるわけですが、それぞれはどのように語るのか、という点に絞ってお二人の間で少し議論して下さいませか。

諸橋：絵はそれ自身語るものですが、絵本は言葉に誘発されて言葉と絵が連動して動きます。絵は静止していて動かないという特性を持ちますが、それは制約であると同時に、じっとした絵を見、読みとらせる時間を与えることによって、見る人をそこに参加させる力を持ちます。

絵本と紙芝居の動きの差は、例えて見れば、絵本のページを繰るのは、ドアノブによって次の場面が開かれる様に似ているのに比べ、紙芝居はふすまを引くことで次の場面が見えて来ると言ってよいでしょう。ふすまの引き方、そのスピード、何かを隠して期待感を抱かせるなど、さまざまの工夫があるわけです。

屋間：(諸橋さんへ) 紙芝居があたかも動いているように見えたのは何か工夫があるのでしょうか？照明の効果でしょうか？

諸橋：大型紙芝居はダンボールにネオカラーを使って描いています。ネオカラーは艶がなく、光を反射せずに、逆に光を吸収します。遠目が利く絵になるように軽快な構図、色に注意しています。

照明は、下から蛍光灯を、そして左右から赤い光を当てています。その方がすべて蛍光灯にするよりも絵が動いているような効果が出ます、何故かは解らないのですが。

屋間：諸橋さんの紙芝居の、絵を動かすダイナミズム、スペクタクル、ライブ感、演ずる人と見る人の間の駆け引きをとて面白く感じました。見せると同時にかくす、何かを見せない、何かをクローズアップすることで、まわりのものを見えなくする、ということでサスペンスを生むのはアニメの大事な手法でもあります。絵は見る人間が近くに寄ったり遠く離れたりして自分の視点を探しますが、映像はその動きを先回りし、カメラが寄ったり引いたりしてある解釈をして見せる。ある意味では押しつけですが、見る人に想像力が欠ける場合でも、一定の体験を与えることができます。

司会：ここでフロアからの質問を受けたいと思います。

発言 1)

諸橋さんに伺います。絵による視覚情報に加えて、語りや効果音による聴覚情報が加わるのが諸橋さんの大型紙芝居の特徴ですが、それぞれの情報量や観客への働きかけ方は異なります。その辺をどうお考えですか。

諸橋：たしかに難しいポイントです。情報を読みとってもらう時間、動かすタイミングなど、常に工夫が必要です。

発言 2):

紙芝居は、聴覚情報の方が視覚情報に比べより感情を表し、視覚情報がより説明的になるように思います。アニメーションでの時間についてはいかがお考えですか？

屋間：短いカットの映画は観客には長く感じられ、比較的ゆったりしたカットの映画は短く感じられます。CMは短いカットで多くの情報を並列します。映像の時間は、それぞれ違った時間体系を持つと言えるでしょう。

発言 3)

大型紙芝居で地獄絵などは恐ろしくなりすぎませんか。子どもの反応はどうでしたか。夜うなされる、というようなことはないのですか。

諸橋：地獄のイメージは、子供が大好きなテーマなんです。効果音つきの地獄の紙芝居は確かに怖いものですが、それは意味のある怖さです。「じごくそうべい」のように地獄を笑い飛ばすのとは違う。閻魔様に舌を抜かれる場面を見て、子どもが実際、うそをつかなくなるという効果はないと思いますが、虚構のかたちであれ、地獄を体験することで、あんなものは絶対にはないとは思えなくなる。ある種のうしろめたさはおぼえるようになるでしょう。

司会：屋間先生のお話でアニメを作っている子どもたちの楽しそうな様子、諸橋先生の大型紙芝居の迫力、そして絵や映像を作ることの難しさと楽しさが素人のわれわれにも伝わって来ました。残念ながら時間が来てしまいました。諸橋先生、屋間先生、そしてフロアの皆さん、ありがとうございました。

(シャウマン ヴェルナー)



幼児期におけるごっこ遊びと発達の間接関係を説いている。「スモールさん」シリーズとごっこ遊びとの関連及び可能性を考察したい。

●『そらいろのたね』における物語の位相—幼児の読みと大人の読み—

佐々木由美子 (東京未来大学)

『そらいろのたね』(中川李枝子作・山脇百合子絵、福音館書店)は、1964年の出版以来、40年以上にわたって読み継がれ、保育の場でもよく読まれている絵本の一つである。多くのブックリストにも掲載され、「幼子の空想遊びの世界をそのまま絵本にしたような魅力がある」(『私たちの選んだ子どもの本』東京子ども図書館、1991年)、「楽しく明るい絵が加わり、子どもの心を捉える」(『どの本よもうかな?』国土社、1986年)などといった評価もされている。

ところが、幼児に『そらいろのたね』の読み聞かせをしていると、その反応は決して一様ではない。「面白かった」という好意的な反応とともに「え?なんで」「なにが?」という不満や疑問に満ちた、釈然としない反応が返ってくることが多い。その釈然としない思いは、結末部分にだけ起因しているわけではないようである。こうした相反する反応は、読者によって、まったく異なる物語として作品を受容していることを意味している。一方、大学生や母親らに読み聞かせをしたときには、幼児のような釈然としない反応は数少なく、明快なわかりやすい物語として受けとめていることが多いようである。こうした反応はいったいどこからきているのだろうか。作品のなにが、こうした反応を引き起こしているのだろうか。

本発表では、〈きつね〉や〈そらいろのいえ〉をキーワードにして、幼児(3歳児・4歳児・5歳児)および大学生の『そらいろのたね』の物語受容のありかたについて、観察やアンケート調査をもとに探っていく。幼児および大学生の読みを比較検討し、その特徴を明ら

かにするとともに、その上で作品に立ち返り、作品のなにがそうした読みを引き起こしているのかについて考察していきたい。

●新宮晋の『いちご』と子どもたちの「読み」について—ヴォルフガング・イーザーの読者理論に拠るつづ—

正置友子 (絵本学研究所主宰)

新宮晋は、世界的な造形作家である。世界の都市のあちこちに彼の記念碑的な作品が立ち並び、また、地球上のさまざまな風土を背景にして、ダイナミックな展示が行われてきた。彼の作品は、風や水がなければ、動かない。しかし、新宮の作品の翼が微風を感じれば、翼は風の動きに身を添わせるように、舞い、旋回し始める。新宮自身、「私の作品は、作品自体では完成しない」と語っている。

さて、新宮の作品だけではなく、すべての芸術作品について言えることだが、作品だけでは、完成しない。そこに読者の読みがあつてこそ、作品は最終的に完成する。ヴォルフガング・イーザーは、文学理論における「受容美学」の提唱者として知られている。その理論は、まず作品があることが重要ではあるが、作品の読み手が存在し、その読みがあつてはじめて作品は完成する、というものである。彼は、作品自体の客観的な意図・意味・価値を否定し、読者の読みを重視する。そこには、日本の教育界に今もって往々に見られる作品とその意味に対する権威的な価値の付加は否定される。それよりも、読者ひとりひとりの「読み」を重要視する。もちろん、作品自体の構造に読者を方向付けるであろう内包された意味があることは確かであるが、作者と読者の相互行為によってはじめて作品の顕在化が完成すると、イーザーは言う。そこには、作者と読者の上下関係、あるいは権威あるもの(教師など)の解釈の押し付けはない。命あるものとして存在しているひとりひとりを等価地として位置づけ、ひとりひとりの「読む」という行為を大事にする哲学者の姿がある。

筆者は、青山台文庫という場で、子どもたちと30年以上に涉って絵本や本を楽しんできたが、子どもたちの読みにびっくりしたり、感心したりする経験が多くある。今回は、新宮晋の絵本『いちご』を子どもたちと丁寧に見、その読みを通して、一冊の絵本が子どもという読者のからだのなかでどのように読み取られ、顕在化していくかを、イザールの読者理論に拠りつつ、考えていきたい。

研究発表 B 大会 1日目(1032教室)

座長：藤本朝巳・今井良朗

梅村氏は、修士論文で研究したジョン・バーニンガムの ALDO について、読者の年齢を越えて感覚に働きかけるバーニンガムの絵本の背景にある表現が何によるものであるのかを考察し、「絵本は、抽象と具象、意味とイメージ、「テキスト」と「イラストレーション」のバランスを絶えずとりながら、伝えたいテーマを読者に投げかけていく。ALDO では、それらすべてが美しく調和している。」という結論に至る研究経緯を発表された。

菊地氏は、ベルギーの G. バンサン『くまのアーネストおじさん』を学生と読み合い、登場者のイメージと読者の受容を、また文化や社会によって規定される関係性のあり方を再考し、発表された。学生が、絵本が語る非説明的言語によって、血縁家族的、教育的つながりではない「共にあるということ」、温もりのある他者理解への示唆を得たことを具体的に発表された。

岩佐氏は、八島太郎の Umbrella, Momo's Kitten, Youngest One に共通して見られる窓に注目し、八島の拘置所体験が表徴として使われていると考え、また八島が、わが子の優しい人間性に The New Sun を見て、絵本創作へ取り組み始めたことと推察し、この三作品を戦後の八島自身の精神の軌跡が読み取れる作品と位置付けた分析を発表された。

生駒氏は、第二次世界大戦中に出版された翻訳絵本『花と牛』から、戦後の〈岩波の子どもの本〉で出版された『はなのすきなうし』への絵本翻訳の経緯を明らかにし、この2冊の絵本翻訳の変遷にみられる光吉夏弥の絵本観を考察された。光吉の個人所蔵の原書などを手掛かりに、戦中戦後という激動の時代をくぐった絵本翻訳の変遷を基に、光吉の絵本観を考察し、発表された。

研究発表は、それぞれ内容のあるもので、B 室では、活発な質疑応答がなされた。各氏の今後の活躍を期待したい。

●ジョン・バーニンガム 絵本におけるテキストとイメージの関係 ALDOをめぐって

梅村祐子(イラストレーター・絵本作家)

昨年度、武蔵野美術大学大学院の修士論文として、ジョン・バーニンガムの ALDO についての絵本研究を行った。その目的は、読者の年齢を越えて感覚に働きかけるバーニンガムの絵本の背景にある表現が何によるものであるのかを、自ら絵本の制作に携わっている筆者の視点で分析し、考察することであった。

研究は、自伝や彼に関する先行研究からバーニンガムの人となりについて触れた上で、バーニンガムのこれまでの絵本に見られる特徴的なテーマを分類し、ALDOを構成している構成要素につ

いて分析した。分析は先行研究を参考に、ALDOのすべての頁に見られる作家の意図を自ら絵本の制作に携わっている筆者の視点で考察した。また、絵本に描かれるテキストとイラストレーションの関係を考察し、ALDOにおけるテキストとイラストレーションの関係を探った。

結論として導き出したのは、ALDOは、「絵・言葉・本」による、新しい芸術である、という事である。

この研究の結果、より明確になってきたものがある。絵本における「テキスト」と「イメージ」の関係についてである。絵本は、抽象と具象、意味とイメージ、「テキスト」と「イラストレーション」のバランスを絶えずとりながら、伝えたいテーマを読者に投げかけていく。ALDOでは、それらすべてが美しく調和している。

絵本における「テキスト」と「イメージ」は切り離せないものなのではないだろうか。

多木浩二は、「子どもにおいては、ことばと身体、ことばと空間、ことばとイメージは、まだ決して完全に分離されていない」とし、そのような(子どもの)「聞き手の文法」に沿って考えると、「絵本が『ことばとイメージ』の関係の様態よりも、これが分離する以前の思考を問いかけているように思われる。」とし、それを「イメージとことばの未分離の状態」としている。

私は、「イメージとことばの未分離の状態」を研究テーマに、改めて ALDOを読み直しながら考察を重ねている。今回はそこに重点を置いて発表する。

●学生と読み合う『くまのアーネストおじさん』

菊地知子(お茶の水女子大学)

ベルギーの絵本作家・画家 G. バンサンの手になる絵本『くまのアーネストおじさん』シリーズを、学部授業において主に保育を学ぶ学生たちと2週にわたって読み合った。主な登場人物のアーネストは、「おじさん」の邦訳が語る通り、成人男性であり、作中クマの姿でわたしたちの前に現れる。登場人物は、それが動物の姿をしている場合であれ、読み手と断絶した存在、相対化しえない存在として描かれているのではない。絵本の中に文字通り「描かれた」人物たちは、描かれたことにより生命性を得て生きているかのごとくに読み手であるわたしたちに現れ、生き生きと生きる「人物」さながらの姿(イメージ)をわたしたちに呈する。わたしたちは、その生を、自らも生きるがごとく、あるいは近い者が生きる生を近い思いで分かち持つがごとく、読み手として「作品を生きる」のであろう。アーネストの、愚鈍とさえ映るような実直さ、朴訥さ、人間味(ユーモア)に、は瞠目するにさえ値する。また、拾われた子どもであるセレスティヌはアーネストの傍らで、自我のしっかりとした、自己主張もし、人の痛みもわかる子どもに育っている。また、クマの“成人”とねずみの“子ども”という、見るからに血縁関係にない他者どうしの、家族とも呼び得る関係性を生きる姿から、文化や社会によって規定される関係性のあり方を再考し、人が生きるということ、個あるいは個の延長としての家族(近代家族)にのみ帰結することを自明視しないための知見を得られるようにも思われた。一連の作品を読み合う中で、学生たちはアーネストとセレスティヌの生きる姿に大きく心を揺さぶられた。



そして二人に導かれながら、また、絵本が語る非説明的言語によって、血縁家族的つながりや教育的つながりでない「共にあるということ」、説明的・マニュアル的でない温もり(体温)のある他者理解への示唆を得た。

●「Umbrella, Momo's Kitten, Youngest One」に見る八島太郎の精神の軌跡」

岩佐優子

八島太郎は絵本第一作 The Village Tree(1953) 発表以来、第三作 Crow Boy(1955) に至るまで故郷である鹿児島県の僻村根占を舞台に作品を描いてきた。その後、アメリカで生まれた長女モモの体験をモチーフに Umbrella (1958)、Momo's Kitten (1961)、Youngest One (1962)の三作を発表しているが、これらは単なるわが子の成長物語の三部作ではない。本発表ではこの三作品に共通して見られる窓に注目した。戦時中の八島の絵物語 The New Sun (1943)のタイトルページにおいても拘置所内とその窓を白と黒で描いた図像がある。戦前、日本で八島は思想犯として逮捕されたが、その拘置所生活の中で出会った名もなき民衆の中に崇高な人間の精神を見出す。そしてこの精神こそが絵物語のタイトルの意味するところであった。タイトルページの拘置所の窓には“The New Sun”と遠近法で記されている。この三作の絵本では、八島の拘置所体験の「窓」と呼応するような窓が、表徴として使われていると考えられる。戦後、重傷の胃潰瘍に倒れて苦しむ八島の顔に二歳のモモが自分の頬をこすりつけて励まそうとしたことから、八島はいたいけな幼児の優しい人間性に The New Sunを見、絵本創作へ取り組み始める。Umbrellaではこの The New Sunを雨という困難をも楽しんで乗り越えていくモモの姿に謳いあげ、1963年には『あまがさ』として日本語版の出版も果たしている。Momo's Kittenは妻の光との共著でモモの姿

を通して母性が描かれているが、八島と共に逮捕された光は拘置所内での拷問を乗り越えて長男を出産した経験を持つ。Momo's Kittenと Youngest One発表と時期を前後して 1962年、八島は戦後初めて故郷根占を訪問している。初の日本語版出版と帰郷への流れの中で作品中の窓はどのように変化していくか。この三作品を戦後の八島自身の精神の軌跡が読み取れる作品と位置付けて分析をする。

●『花と牛』から『はなのすきなうし』へ—光吉夏弥の絵本翻訳に関する一考察—

生駒幸子(龍谷大学短期大学部講師)

第二次世界大戦中に出版されたアメリカの翻訳絵本『花と牛』(ムンロー・リーフ作、ロバート・ロウソン画、光吉夏弥訳 筑摩書房 1942年)から、戦後の〈岩波の子どもの本〉で出版された『はなのすきなうし』(マンロー・リーフ作、ロバート・ローソン絵、岩波書店編集 岩波書店 1954年)への絵本翻訳の経緯を明らかにし、この2冊の絵本翻訳の変遷にみられる光吉夏弥の絵本観を考察する。

『はなのすきなうし』は、〈岩波の子どもの本〉の第1期出版(1953年12月～1954年12月)の第4回配本において出版された翻訳絵本である。『はなのすきなうし』は、戦中『花と牛』というタイトルで筑摩書房の〈世界傑作絵本〉シリーズの1冊として光吉夏弥の翻訳によって出版されていた。原書は、1936年にアメリカで出版された The Story of Ferdinandである。

この2冊の絵本を翻訳した光吉夏弥(みつよし・なつや 1904-1989)は、戦前から海外の子どもの本・研究書を蒐集、それらの資料を駆使して、戦中戦後のわが国における児童書出版に貢献した人物である。光吉が所蔵していた児童書と研究書等のコレクションは、白百合女子大学児童文化研究センター内に光吉文庫に遺

されている。

近年の研究で、光吉文庫において書き込みのある原書 The Story of Ferdinandが見つかったという。『花と牛』に付された作品解題と作者紹介、戦中における光吉の評論「翻訳者の反省」（『少国民文化』第2巻第1号 少国民文化協会 1943年1月）、「絵本の世界」（『生活美術』第3巻第9号 アトリエ社 1943年9月）、また戦後の評論「こどものベストセラー」（『日本児童文学』第5号 日本児童文学者協会 1947年11月）などに、この2冊の翻訳にまつわる諸事情と時代背景が垣間見られる。

本研究では2冊の翻訳絵本に関する上記の史料をたどりながら、2冊の絵本の翻訳出版の経緯を調査し、戦中戦後という激動の時代をくぐった絵本翻訳の変遷に、光吉の絵本観を考察する。

研究発表 C 大会1日目(1033教室)

座長：杉浦篤子・永田桂子

C室は4本の研究発表がありました。C室の発表者は継続して発表しておられる方たちがほとんどだったので、時間配分などスムーズにいったと思います。配布資料なしという方もおられましたが、パワーポイント画面の進行が速く、またたくさんの文字が書かれていることなどから、画面のプリントアウトだけでもほしいという声がありました。

4本それぞれ研究の観点や取組は異なりますが、保育現場に関係しての発表でしたから、討議が深まれば何か共通する問題提起も生まれたかと思いました。今後の発表の、さらなる積み重ねに期待がもたれます。

3室に分かれての研究発表ですので、聞いてくださる人数は少なめという感がありました。人の出入りは多くはありませんが、発表によって偏りが出たように思います。

研究発表の数が増えたことはうれしいことです。しかし3室が必要か、時間はきつくなりますが、2室で出来ないでしょうか。人の出入りは多くはありませんでしたが、聞きたい研究発表が分散、あるいは重なっており、十分に聞くことが出来なかったという感想も耳にしました。

手伝ってくれた学生さんたちは手際もよく、資料配りなど配慮が行き届いていました。おかげ様でC室の発表を無事終えることが出来ました。

●保育雑誌「幼児の教育」に見られる絵本に関する記述

—「保育要領—幼児教育の手びき—」（1948）の前後—

細川七重（関西学院大学大学院・研究員）

「幼児の教育」は、わが国において、最古で最長の幼児保育専門誌である。「幼児の教育」の内容は、幼児保育界の変遷を、歴史的にたどることができる資料であり、各時代の保育内容や倉橋惣三・東基吉・和田実ら先駆者の理論を明らかに知ることができる。

「幼児の教育」は、「婦人と子ども」という名称で、1901(M34)年1月にフレーベル会(1896年創立)より創刊された。その後、誌名の変更が何度かあり、1923(T12)に現在の名称の「幼児の教育」と改題された。

「幼児の教育」は、一般の商業雑誌と違って大学側で編集するという方針は、創刊以来変わらず現在も脈々とその精神が受け継がれ、幼児教育と共に歩んで来ており、国の教育法規が変わった時は、いち早く問題を提起し、それにかかわる対応をていねいに取り上げている。

本発表では、「幼児の教育」の記述の中から各時代の絵本に関する保育内容やその変遷を垣間見ることによって、その時代をより深く掘り下げ、絵本に関わってきた先人たちに学び、よりよき未来へとつなげることを研究目的とする。

特に、1948(S23)年に刊行された「保育要領—幼児教育の手びき—」の中に、絵本という言葉が初めて、しかも多くの箇所を示されたことに着目し、その時代の前と後の時代の変化のなかでの「幼児の教育」に記述された絵本に関する内容を考察する。

●「総合保育絵雑誌」の史的考察

—「キンダーブック」「チャイルドブック」「ヒカリノクニ」「よいこのくに」「こどものくに」「ワンダーブック」「なかよしメイト」を取り上げて—

永田 桂子（文京学院大学大学院兼任講師）

1927(昭和2)年11月にフレーベル館から創刊された「観察絵本 キンダーブック」は、幼稚園を通して直接販売するという方式と、保育内容に即した多彩な誌面構成をもつという、2つの特徴を備えていた。その後、他社からも同販売方式・類似の誌面構成をもつ絵雑誌が発行されて一つの歴史を成してきている。総称として「月刊保育絵本」「月刊保育絵雑誌」、最近(特に2000年以降)では「総合絵本」「総合保育絵本」等が使われるが、ここでは出版形態の特徴から「総合保育絵雑誌」と呼び、その歴史の整理を試みる。

「観察絵本 キンダーブック」に続くものとしては「保育絵本 コドモヒカリ」第4巻第3号(帝国教育会出版部、1940(昭和15)年3月～)があげられる。帝国教育会出版部は1944(昭和19)年4月に国民図書刊行会に改組され、巻号はそのままに誌名が「日本ノコドモ」第8巻第4号と変更される。この時点でしばらく書店販売のみとなる。これは戦後も継続発行されていき、1949(昭和24)年10月に「日本のこども絵本 チャイルドブック」第13巻第10号(国民図書刊行会)と更に誌名変更し、直販方式を採って現在に続く。もっとも「チャイルドブック」の創刊を1949(昭和24)年4月に置くという考えも成立する。この経緯については第11回本大会(2008年)にて発表をした(「戦後・1950年代までの保育絵本の史的考察—「チャイルドブック」成立過程を通して—」)。

一方、「キンダーブック」は「ミクニノコドモ」と解題して第16巻第11編(1944(昭和19)年3月)まで発刊され、その後は「日本ノコドモ」に併合された形になる。実質は終刊で、1946(昭和21)年8月に新たな発刊となる。続いて、「ヒカリノクニ」(昭和出版株式会社、1946(昭和21)年1月)、「観察絵本 よいこのくに」(学習研究社、1952(昭和27)年4月)、「こどものくに」(鈴木出版、1967(昭和42)年4月)、「個性をのぼす幼児の絵本 ワンダーブック」(世界文化社、1968(昭和43)年4月)、「なかよしメイト」(メイト企画、1983(昭和58)年4月)が創刊されて、今日にいたる。



先行研究には、棚橋美代子、中村悦子、黒井健氏の詳細な資料紹介及び論考があり、参考にさせていただいた。

●保育者は童話・昔話の絵本の読み聞かせと素話をどのように行っているか

水野智美(筑波大学大学院准教授)

童話や昔話は、親や祖父母、保育者などが絵本を読み聞かせたり、素話で伝えたりして子どもに受け継がれてきた。しかし、最近では、子どもに童話や昔話の絵本を読み聞かせる親が年々減少している(徳田・水野,2010)。また、子どもが音の似ている言葉と自分の知っている言葉とを取り間違えて昔話の内容を覚えている(例えば、「きじ」を「きりん」と間違えて覚える)という素話の影響が以前にはしばしばみられたが、最近ではこのような間違いがほとんどなくなっている(水野・徳田,2010)。

そこで本研究では、幼稚園・保育所の保育者を対象にした調査を行い、園の中で童話や昔話の絵本の読み聞かせや素話がどのように行われているのかについて明らかにすることにした。

調査対象者は、茨城県、埼玉県、東京都、愛知県の幼稚園教諭、保育所保育士の463名であった。共同研究者が担当する保育者研修会の場において無記名式の質問紙を配布し、回収した。

結果の概要は以下の通りである。

①童話や昔話の読み聞かせの経験を保育歴でみると、「よくしている+時々している」と答えた者は5年以下72%、6~10年86%、11~15年84%、16年以上94%であり、経験年数の浅い保育者の方が読み聞かせをしていないことがわかった。同様に、童話や昔話の素話の経験についても、「よくしている+時々している」と答えた者は5年以下14%、6~10年29%、11~15年35%、16年以上53%であり、若い保育者はあまりしていないことを確認した。

②童話や昔話の絵本のうちで、読み聞かせをした者の最も多かった作品は「ももたろう」(65%)であり、「赤ずきん」(62%)、「おむすびころりん」(59%)が次いだ。素話についても、「ももたろう」(29%)が最も多く、「赤ずきん」(23%)、「おむすびころりん」(20%)の順であった。このことから、読み聞かせに用いられる童話や昔話が素話でも多く用いられていると言える。

③「ももたろう」を読み聞かせた経験のある者のうちの42%がこの作品の素話をしてきた。一方、「ももたろう」の素話をしてきた者の93%がこの作品の読み聞かせをしていた。素話をして、読み聞かせたことがない者は4%のみであった。他の作品も同様に、読み聞かせをせずに素話だけをしていることはほとんどなく、素話は読み聞かせと併せて行われていた。

●子どもと童話・昔話の絵本のかかわり —幼稚園・保育所における実態—

徳田克己(筑波大学大学院教授)

徳田・水野(2010)によると、1990年(横山・横山・徳田,1991)と2010年の結果を比べると、家庭で所有する昔話や童話の絵本の種類と数が大きく減少していること(例えば、「ももたろう」に関しては1990年では5・6歳児の家庭で97%が所有していたが、2010年では55%にすぎない)、子どもたちの理解している昔話の中に現代的なキャラクター(アンパンマンなど)が出てくることが確認できた。子どもの理解しているお話の登場人物がキャラクター化される原因の一つに幼稚園・保育所においてパロディ化したお話を取り上げる機会があることが示唆された。

そこで今回、幼稚園・保育所の保育者を対象にした調査を行い、園の中で子どもが童話・昔話の絵本とどのように関わっているかについての実態を調査した。調査対象者は、茨城県、埼玉県、東京都、愛知県の幼稚園教諭、保育所保育士の463名であった。徳田が講師を依頼された3回の保育者研修会の場において質問紙を配布し、無記名式で回収した。

結果の概要を以下に示す。

①対象者が担当している保育室の中に絵本が「51冊以上ある」と答えた者が38%、「31~50冊」24%、「10~30冊」28%、「10冊未満」10%であった。

②絵本の読み聞かせを「よくしている」保育者は63%、「時々する」30%、「あまりしない」+「まったくしない」3%であり、多くの者が積極的に読み聞かせをしていることが確認できた。しかし、童話や昔話の読み聞かせについて尋ねたところ「よくしている」25%、「時々する」53%、「あまりしない」+「まったくしない」12%であり、読み聞かせはしているがあまり積極的ではないことがうかがえる結果となった。

③童話・昔話を劇で取り上げることが「よくある」+「時々ある」園が77%であった。そのうちキャラクターを登場させることが「よくある」+「ときどきある」園は26%と予想外に高かった。

④パロディ化した童話・昔話を子どもたちに話したことのある保育者は「よく」+「時々」が13%であった。

研究発表 A 大会 2日目 (753教室)

座長: 大橋真由美

2日目 A室の研究発表は、いずれも新しい視点から取り組んだ絵本研究であった。各発表は充実した内容であり、活発な意見交換も行われた。

永井靖子さんの「法話に於ける絵本の取り組みについて」は、新しい信頼関係を築くために、年忌法要に於ける法話に、絵本を取り入れた試みの実践報告であった。『いのちのまつり「ヌチヌチスージ」』（草場一壽作、平安座資尚絵、サンマーク出版、2004）、『おじいちゃんのごらくごらく』（西本鶏介作、長谷川義史絵、鈴木出版、2006）の二書を通して、「残された者」に向けて「いのち」の意味を伝えている。研究発表としても、要点が整理されており、構成が分かりやすかった。

大石都希子さんの「絵本を題材とした談話分析—昔話絵本『かさじぞう』におけるマルチジャンル」は、絵本を「マルチジャンル」と捉え、『かさじぞう』（瀬田貞二再話、赤羽末吉絵、福音館書店、1966）を複合的に分析したものであった。発表内容は情報量の多い、充実したものであったが、基本的な問題点として、レジユメが配布されず、分析手法とした「メイナード(2008)」のフルネームと参考文献が示されなかった。また、先行研究批判を行うのであれば、充実した先行研究レビューが必要である。

森覚さんの「お伽漸化された宗祖伝絵本『絵本空海 お大師さま』」は、真言宗宗祖・空海の入定 1150年御遠忌にあたり企画編集された『絵本空海 お大師さま』（梶山俊夫絵、講談社、1984）の視覚表現についての発表であった。「お伽漸化」の用語についての質問があった。先行研究に於いて、どのような用語がどのような意味で使用されているかに注意を払い、研究発表に於いて、使用用語の選択には慎重さが求められる。

以上のように三者の研究発表は、今後の研究成果に期待したい内容であったが、基本的な問題点もあった。その点については、発表者全員の課題として、一層の注意を促したい。

●法話に於ける絵本の取り組みについて

永井靖子 (真宗大谷派智光山宗念寺准坊守)

近年、葬儀や寺院のあり方、その意義を問う書物が次々に出版され、マスコミでも度々関連記事を目にするようになった。こういった社会的風潮を背景に、「寺離れ」が進む現状に危機感を感じている寺院も多いのではなかろうか。詰まるところ、「葬式仏教」と揶揄されるような葬儀のみで繋がる寺院—檀家信徒ではない、新しい信頼関係を築いていくことが必要であるといえるだろう。

当寺院 (真宗大谷派 智光山 宗念寺) では、そういった試行錯誤の一環として、2007年より年忌法要の法話に絵本を取り入れる試みをしている。これは、法話を充実させ、御門徒の方々に法事を意義あるものと認識して頂くという意図によるものだが、この法話に於ける絵本の取り組みについて紹介、発表したい。

使用している絵本は次の2冊である。

『いのちのまつり 「ヌチヌチスージ」』、作/草場一壽、絵/平



安座資尚、サンマーク出版、2004年10月。

『おじいちゃんのごらくごらく』、作/西本鶏介、絵/長谷川義史、鈴木出版、2006年2月。

当寺院では毎週末、数件の法事が行われ、法要は大抵1時間毎の入れ替わりで営まれる。読経がおよそ20分、法話が5～10分程度で、その後墓参りをして頂く。つまり、絵本は10分程度という短い法話で使用するため、必然的に量的制約が課せられる。

さらに当寺院では、故人とその御家族への配慮から、これらの絵本2冊を故人が比較的高齢で亡くなった三回忌以降の年忌法要、且つ、そのご法事に数名の子供達(小学生程度)が参列する場合にのみ使用している。これは、これら2冊の絵本の文章、絵、テーマ、ストーリーなどから、当寺院で判断したものだが、こういった参列者への配慮は必要不可欠と思われる。

基本的には法要に参列する子供達に向けて絵本を読むという形であるが、実のところ、子供達よりもむしろ年配の方々に感銘を与えている印象がある。故人の法要という特別な時、寺院という特別な場、そして平易な文章と心む絵—これらがうまく噛み合えば、法話に於いても絵本が有効に機能し得るといえるのではなかろうか。

●「絵本を題材とした談話分析—昔話絵本『かさじぞう』におけるマルチジャンル—」

大石都希子 (北海道大学大学院 国際広報メディア・観光学院 国際広報メディア専攻 修士2年)

本研究では昔話絵本『かさじぞう』におけるマルチジャンルの現象を「絵」と「言葉」を中心に分析し考察する。「ジャンル」とは一般に表現様式の種類を指し、またジャンルとジャンルが複合的に交錯し融合することを「マルチジャンル」と言う(メイナード、2008)。絵本も「ビジュアル(絵)」と「バーバル(言葉)」というそれぞれの表現様式が複合的に交錯・融合している「マルチジャンル」なメディアであると考えられる。しかしビジュアルなものと、バーバルなものはそれぞれに適した方法で研究がなされてきたため、そのジャンルについてのみ分析するという立場が多い。絵本研究についても同様で「絵」と「言葉」を複合的に分析した研究は少ない。そこで本研究では、絵本を複合的な「マルチジャンル」のメディアとして捉え、瀬田貞二再話・赤羽末吉画(1966)の昔話絵本『かさ

じぞう』を分析の対象とし、そこで見られるマルチジャンルの現象を考察する。

分析はメイナード(2008)の提唱する「マルチジャンル談話分析」の分析手法を参照する。メイナード(2008)では分析の際に談話を、基本的な情報(情報はどのような特徴を持つのか)・基本的な原理(情報はどのように提示されているのか)・文章の談話構造(物語はどのような組立がされているか)・読者との関係(登場人物の表情や視線等・言語のスタイルは読者にどのような態度をとるか)という4つの段階に分けた。本研究でもこのようなメイナードの分析方法に倣い、昔話絵本『かさじぞう』を分析・考察する。

昔話絵本『かさじぞう』におけるマルチジャンルの現象を見ることで、「絵」と「言葉」がそれら以外の様々な領域の要素とかがわり合っていると考えられる。それが具体的にどのような領域の要素と関係しているのか、またその関係性がどのようなものかということに重点を置き、今後の分析を進めていく。

●お伽噺化された宗祖伝絵本『絵本空海 お大師さま』

森 覚(大正大学大学院 文学研究科 比較文化専攻 研究員)

本発表では、仏教絵本研究の一環として論じるべき『絵本空海 お大師さま』の諸表現をとりあげ、その効果を考察する。なかでも注目したいのは、近代の日本民芸運動において「民画」と称される大津絵や丹緑本などの御伽噺絵様式を取り入れた本作品の視覚表現である。

『絵本空海 お大師さま』は、1984年に真言宗智山派の教化研究所と御遠忌奉修局が大手出版社である講談社の協力を得て企画編集した仏教絵本である。タイトルにもあるとおり、その内容は、真言宗の宗祖空海の生涯を題材とした宗祖伝物語となっている。作品が発表された1984年は、真言宗にとって宗祖空海入定1150年御遠忌という節目の年にあたる。同年には、和歌山県高野山金剛峯寺にいたる高野山道路(国道370号・国道480号)が全線開通し、さらには中華人民共和国の西安市青龍寺東塔院遺跡に「恵果・空海記念堂」が落成したことから、真言宗各派をあげて盛大な法要とイベントが行われた。また、映画や出版などのメディアもこれに注目し、松岡正剛の『空海の夢』や『弘法大師空海全集』全8巻、全真言宗青年連盟が全面協力した東映映画『空海』など、数多くの空海関連作品が制作されている。

マンガラブームと呼ばれる時期に発表された『絵本空海 お大師さま』の作画は、チェコスロバキア世界絵本原画展や大手出版社の賞を受賞し、すでに絵本作家として高い評価を得ていた梶山俊夫が担当している。有名な絵本作家が仏教絵本を手がける事はきわめて珍しいことだが、梶山の起用は、同作品の視覚表現を『弘法大師行状絵巻』などの伝統的仏教芸術を踏まえた完成度の高いものに引き上げている。

宗祖伝を絵巻物や民画の表現様式で描くことにはいかなる意義があるのか。発表ではこの点について、マンガラブームの影響や、梶山が追加した物語に表れる怪物たちの表現、日本の絵本における伝統的絵画技法の展開などを踏まえながら明らかにする。

研究発表B 大会2日目(754教室)

座長: 佐々木宏子

・絵本をいかに読むか?—『すっすっはっはっ こ・きゅ・う』における呼吸と声の意味—

長野麻子(立教女学院短期大学)

研究発表対象としてとりあげられた絵本は、『すっすっはっはっ こ・きゅ・う』(作・長野麻子、絵・長野ヒデ子、童心社、2010)である。発表者は音楽学者として、身体表現の視点から音楽の研究活動を行うと同時に、短大の保育者養成の教員の立場から、「日常生活における私たちの呼吸や声が、いかに創造性に満ち、すぐれたコミュニケーションの媒体としての役割を果たしているか」を検証するための試みである。発表者/作家自身による読み聞かせが行われ、呼吸・声・表情が一体となったパフォーマンスとなった。

本研究の視点は、最近のリズミカルなオノマトペを多用する赤ちゃん絵本の水脈にも通じるものがある。両者の関係を比較・分析することで、呼吸—リズミカルな身体をつかった発声—絵によるイメージ生成—コミュニケーションの循環が、より普遍性をもって現れるかも知れない。(当日配付資料1枚1ページ)

・幼稚園における絵本の繰り返し読みの意義の検討—クラスの育ちと繰り返し読み絵本に対する幼児の身体反応・言語反応との関連から—

並木真理子(有明教育芸術短期大学子ども学科講師)

本研究は、入園年齢(ここでは4歳)クラスにおいて、同一絵本を長期に読み聞かせ、幼児の反応とクラスの育ちのプロセスを対比することで絵本の繰り返し読みの意義を検討する。

期間はほぼ一年間でaクラス(32名/計9回)は、『ぐるんぱのようちえん』(福音館書店)、bクラス(25名/計8回)は『あおくんときいろちゃん』(至光社)が使用された。結果としては子ども達が繰り返し「ため込んだ」イメージが言語や絵、遊びとして表現されることに結びつくことが示唆された。質の異なる二つの絵本がなぜ選択されたかの理由と、幼児の反応がデータで異なっているため、さらに詳しい分析・考察が望まれる。(当日配付資料3枚6ページ)

●絵本をいかに読むか?—『すっすっはっはっ こ・きゅ・う』における呼吸と声の意味—

長野麻子(立教女学院短期大学)

『すっすっはっはっ こ・きゅ・う』(作・長野麻子、絵・長野ヒデ子、童心社刊)は、2010年11月に発表した初の自作の絵本である。この絵本は呼吸をテーマにし、読者が自由に呼吸をしたり、声を発したりすることで、それらの表現やコミュニケーションを楽しむことができるという意図に基づいて作られている。

この絵本の著者である発表者は音楽学者として、身体表現の視点から音楽の研究活動を行っていると同時に、短期大学における保育者養成課程の音楽の専任教員として、教育活動に携わっている中で、日常生活における私たちの呼吸や声が、いかに創造性に満ち、すぐれたコミュニケーションの媒体として役割を果たして



2008)、絵本の繰り返し読みが子どもの絵本経験に大きく影響することが示唆されている(竹内・市原・斎藤2009)。

ところで、幼稚園における教育課程では、幼児の発達段階に沿って期や月ごとの指導計画が立てられ、保育は幼児の実態に沿って連続的に行われている。絵本という保育教材についてもその期や月ごとのねらいや幼児の実態、保育の流れに沿って

いるかということに気づき、その重要性を指摘してきた。そして、このことをより広く、わかりやすい形式で伝えると同時に、誰もが体感でき、さらなる表現の世界を構築することを可能にしようと、本作で絵本によって試みたのである。

しかしながら、果たして絵本の中で、このような意図が実現可能なのか、読者がこの絵本をいかに読み、楽しむことができるのかということが、一方で本作のテーマでもある。なぜならば、呼吸や声を発生させ、自由な表現として成り立たせる絵本などはおそらく存在したことがなく、またその意義が絵本という媒体を通して、いかに見いだせるかということへの評価も十分に存在するとは言い難いからだ。だが、絵本そのものの意義を改めて考えた際、そこにおける言葉や絵がいかなる役割を果たすべきなのか、読者は絵本から何を読み、感じ取るのかといった本質的な問いを提起し、議論することは常に重要であり、少なくとも絵本には、はかり知れない自由が生起しては、未知の世界へ読者を誘うことができるものと発表者自身は確信している。

したがって、そのような視点から絵本が作られ、読まれることが可能であるならば、本作は呼吸や声という生命の原点に立ち戻り、私たちの現実世界やコミュニケーションに新たな領域をもたらすことができるのではないかと期待される。本発表ではこのことを、本作におけるテーマ、テキストと絵、読み方の点から検証することを目的とする。

●幼稚園における絵本の繰り返し読みの意義の検討ークラスの育ちと繰り返し読み絵本に対する幼児の身体的反応・言語的反応との関連からー

並木真理子(有明教育芸術短期大学 子ども学科 専任講師)

1. 研究の目的

幼稚園教育要領において、絵本は言語領域、表現領域の重要な保育教材として位置づけられ、保育現場では、絵本を通して感動を体験し、感性を育むことをねらいとして読み聞かせが行われている。また、幼稚園生活の中で幼児が自ら絵本に関わる場面では、読んでもらったことのある絵本や保育者が読み聞かせを行ったことのある絵本を選ぶ事例研究が報告されており(横山2007、並木

2008)、絵本の繰り返し読みが子どもの絵本経験に大きく影響することが示唆されている(竹内・市原・斎藤2009)。

ところで、幼稚園における教育課程では、幼児の発達段階に沿って期や月ごとの指導計画が立てられ、保育は幼児の実態に沿って連続的に行われている。絵本という保育教材についてもその期や月ごとのねらいや幼児の実態、保育の流れに沿って選ばれ、実践されており、絵本に対する幼児の反応もクラスとしての育ちによって変容していくと考えられる。

そこで、本研究では、幼稚園において長期的に同一絵本の繰り返し読みを行い、絵本の繰り返し読みに対する幼児の身体的反応・言語的反応の変容とクラスの育ちの変容とを照らし合わせて分析し、幼稚園という集団生活における絵本の繰り返し読みの意義を検討することを目的とする。

2. 研究の方法

研究対象：東京都の公立幼稚園 A園 4歳児 aクラス / B園 4歳児 bクラス
 観察時期：平成 22年 5月～平成 23年 2月
 繰り返し読み材料：
 aクラス『ぐるんぱのようちえん』(西内ミナミ作 /堀内誠一絵 福音館 1966)
 bクラス『あおくんときいろちゃん』(レオ・レオ二作 /絵 至光社 1984)

保育者へのインタビュー：平成 22年 7月・12月・平成 23年 3月

3. 結果と考察

身体的反応・言語的反応ともに、クラスの育ちの変容時期に反応の違いがみられた。また、自分が安定し周囲への好奇心が高まる時期には「また同じ絵本？」という不満の高まりも観察され、繰り返し読みの効果や実践方法にも新しい示唆が得られた。これらの結果から、クラスの育ちに対応した絵本の選び方、実践方法を考えることによって、幼稚園という集団生活の中での絵本の繰り返し読みが、幼児の共有体験を広げ、読みの力につながることを示唆された。

作品発表

作品発表 A (751教室)

座長: 香曾我部秀幸

●「カニとばらばら」

山田小百合(イラストレーター・子ども造形教室講師)

●「さわこちゃん」

春日和香子(手づくり絵本、布絵本作家)

●「君に見せたいものがあるんだよ」

宮崎詞美(横浜美術大学准教授)

●「秘密の花園」

加賀美裕子(東京展「絵本の部屋」事務局)

●「ころん」

中島千恵子(千葉経済大学短期大学部)

本大会では、作品発表者が10人に達したため、2室に分かれて行われた。教室使用に制限があり、一般の講義室においてのOHCによる口頭発表(自作の読み語り)のみで、作品画面の展示がなされなかったことは、作品発表の場としてはきわめて不十分であり、今後の課題としなければならない。

発表された作品は、自身の日常生活に沿ったもの、身近にあるもの・あったもの、自身の深い思いを語るもの、技法に工夫を凝らしたもの等、それぞれに自らの内なる衝動に突き動かされて生み出された表現であったことは確かであろう。ただ、これらの作品を通して、この場に集った方々が、果たして何らかの刺激を受けることができたか否かについて、疑問を抱いてしまったのは、筆者だけではないだろう。作者にとって何故「絵本」という表現の形を取らねばならなかったのか、その理由が明確には見えてこなかった。

唯一、宮崎さんの発表は、絵本制作のワークショッププログラ



ムのための作品で、「お話を考えるのが苦手」「思うように絵を描けない」と感じている人たちに向けて、身近なものを描き、日常の言葉を用いて絵本を生みだすことができることを提示したものであった。形態は、正方形の紙に螺旋状の切り込みを入れて折り畳んだスパイラルブックの表裏に二人の登場人物を設定したもので、ページをめくる方向によって変化する数多くの組み合わせの中で両者の会話が生まれる構成に、作者の独自性が見られた。絵と詞が融合する、ストーリーを展開させていく主人公が明確である、ページをめくることによって物語が進行し用意された結論へと導かれる、といった絵本の特徴を基礎に置きながらも、絵と詞が同じレベルで存在し、読者がフレキシブルにストーリーを展開させ自由に読み取っていくことのできる可能性を求めた実験的な作品といえる。これを「作品発表」として取り扱うことに異論はあるかも知れないが、当学会における発表として、斬新で刺激的であったことは間違いない。

いま「絵本学会」という場における「作品発表」の意義をあらためて考え直すときが来ているのかも知れない。ここでは、微温的な「手づくり絵本」のお披露目は必要ではないと筆者は考える。見る者読む者に強い衝撃を与え、激しい拒否感を抱かせ、あるいは、想像を絶する実験が示される、絵本表現の未来が予言される、そのような場であってこそ、「作品発表」が大会の主要プログラムの1ページに刻まれるのではないだろうか。(香曾我部秀幸)



作品発表 B (752教室)

座長: 笹本純

●「あそこ、ね —おねえさんせんせいのちいさかったころ—」

梶浦恭子(岐阜女子大学家政学部生活科学専攻)

●「望郷の家」

東山直美

●「人本(ひとほん)」

別府浩実(貞静学園短期大学教員)

あわや まり(ひらく堂運営/詩人)

●「ゆうれいのしわざ」

内海優美(会社員)

●「びっくりばこ」「木だいまおう」(2点)

物語をともなう絵画指導より生まれた小学生制作の絵本

沖中重明(京都女子大学発達教育学部非常勤講師/しもがも子どもアトリエ主宰)

B室では全5件の発表があった。以下、各発表の内容を簡単に紹介する。

○梶浦恭子さんの発表では、保育士や幼稚園教諭を目指す大学生が授業の中で制作した作品が紹介された。各人が幼少時を思い起こして幼い自分を自画像として描き、画面を説明するテキストを童謡「さっちゃん」の替え歌の形で付与した、紙芝居形式の作品である。描画技法は切り紙絵。

○東山直美さんの絵本は、作者(発表者)が幼少時を過ごした兵庫県山間部の旧家の佇まいを紹介するという内容のもの。モノクロの墨絵で、畳の座敷に大黒柱、屋内に設けられた井戸や海鼠壁の土蔵、等々を丁寧に描写し、かつて豊かに営まれていた生活の様々を彷彿させる作品。

○別府浩実さんとあわやまりさんが作った「人本」は、通常の冊子本でなく、30~40cm四方ほどに畳まれる一種の折り本である。これを上下左右にいっぱい開くと、人間の等身大の立ち姿が描かれた大きな画面が現れる。画面の各所に小窓が幾つもあり、それを開けると人生途上の小エピソードを語るテキストと画像とが見える様になっている。男編と女編各1冊、計2冊組。



○内海優美さんの作品は、人の持つ「先入観」や「妄想」が原因となって日常的な営みの中に紛れ込んでくる仄暗いファンタジーを描いた絵本。周囲の人や世界になじめない主人公の少女が、現実の全てのものに必ず付帯する「影」を徐々に無くし、「ゆうれい」になってしまうという物語である。

○沖中重明さんが紹介した2冊の絵本は、軽度の障がいを持つ2人の小学生が私設の絵画教室という場で制作したもの。それぞれ高密度に描き込まれた画面からなる迫力ある絵本で、物語もユニークで楽しい。通常子どもの作画は一枚絵だが、適切な指導で連続画からなる絵本を生み出した例としても貴重。

なお、今大会では、作品展示について時間・場所が特に用意されなかったため、全員の発表終了後、会場の机を配置替えし平台で全作品を展示した。



ラウンドテーブル

■ラウンドテーブル1

大学教育における絵本づくり

話題提供者 小林史子(現代美術家・大正大学非常勤講師)
佐藤博一(デザイナー・京都造形芸術大学教授)
コーディネーター 宮崎詞美(横浜美術大学准教授)

◇あらゆるメディアが存在する現代、絵本制作のアプローチは様々な視野から行われている。2人の話題提供者による教育実践報告からその様子を探った。

●小林氏の報告：大正大学における授業「異文化ワークショップ」について

・目的

クリエイティビティを発揮し芸術家の思考体験を学ぶ
生きるツールとしての創造性の獲得、既成概念の突破、遊びの重要性の発見

・問題点

美術実技の基礎的経験の無い学生に制作を課す困難
卒業後の進路と直接的な結びつきが希薄

・カリキュラム

春：芸術の起源とは何か・言葉とビジュアルの実験・抽象的な映像表現

秋：好きな絵本プレゼンテーション・アイディアドローイング・最終課題

最終課題における既成のストーリーを解釈した自由作品の制作と個別指導プロセスを報告。箱やガラス瓶等を用いた学生作品を展示した。

●佐藤氏の報告：京都造形芸術大学デザイン学科の授業体系とイラストレーションコースの絵本課題について(07年「教育現場の絵本」に続き2回目)

・デザイン学科の授業

共通テーマを設定し4年間でデザインの基礎から様々なメディアによる表現やデザインフィロソフィーまで広く習得

1年次：ベーシック 2年次：幅を広げる 3年次：卒業制作プランニング

4年次：卒業制作・美術館大学構想

・イラストレーションコースの絵本課題

2年次：既存の物語からイラストレーションを起こす基礎的表現演習

3年次：自由テーマで絵本制作

・目的

デザイン教育：総合的な課題として絵本を制作

コミュニケーション：表現メディアとしての可能性を分析、把握

ナラティブデザイン：物語性を見つけるデザインを習得し表現する

◇学生作品を展示、個別指導内容を報告。通信教育授業の32P絵本課題より、企画・イラスト制作・編集者とのやりとり・DTP・出版を模擬的に経験する制作指導のプロセスを報告した。



●質問コーナー：相互に質問を提示し回答

宮崎：制限があるということはどう指導しているか？

小林：いかにクリエイティビティが発揮されるかが重要。制限は無い。課題の提出期限はある。

佐藤：課題は制限から入る。デザインは単につくりたいものをつくるのではなく目的を表現すること。目的と表現する時の制約を自ら見つける能力を備え問題の解決に有効に利用する。様々なデザインの分野にも生きる。

宮崎：絵本が絵本になる時、自由な造形活動に形を与えて行くプロセスがあり、手がかかりとして制限がある。プロダクトに通じる。

佐藤：作品制作の後と前で学生に何らかの変化はあるか？

小林：中身だけのイメージでは完成しない、内なる自分を解放できたという意見が学生から出た。

佐藤：課題を通じて見える変化は興味深く、学生の表現に感動し教員も変化を共有していく。叙情的で個人的な表現が対話の中で出現する。課題制作が互いに変化を起こす面白さが教育の現場にはある。

宮崎：つくれないと思っている学生の内面の表出に対するおそれが表現できる自信に変わる。内なる自分の解放が根底にあるのでは。絵も言葉も基本的な構造もある絵本は既に内面にあるビジュアルを形にできる可能性を持っている。学生と教員相互の変化に繋がっているのでは。

小林：絵本の未来とは？絵本は専門外で解らないが紙媒体が消えていく不安を感じる。

佐藤：文化として生き残る道筋は必ずある。出版社が絵本部門を続けていく経費を考える必要もあり市場に出るマスメディアとして絵本を残していくのは難しい部分もある。一方、出版社に頼らず自ら編集しネット等の流通経路を使う方法があり、出版メディアを個人のものにすることも可能だ。ストーリーをきちんと見ていく指導で編集のわかる作家を育てたい。課題でのシミュレーションが未来に繋がるだろう。様々なコミュニケーションメディアの形態が起こりうることは90年代頃から議論されている。その中で絵本の可能性を考えていく方法もある。

宮崎：学生はリトルプレスに興味を持っている。掌の範疇で何かを作り上げることはマスメディアであるビジュアルデザインからはずれ工芸的な要素が多くなる。一方、作品

を映像メディアにして無料動画サイトにアップする学生もいる。利益では無く自己存在のアピールや人と繋がりたい衝動で動く。絵本との付き合い方はグローバルに広がる。

●意見交換

武蔵野美術大学と韓国ホンイク大学で教鞭をとる申明浩氏：韓国と出版物の複製に対する意識、購買層や受容層の特徴を比較すると、日本はコピーが出回らず子供一人ひとりに親が買い与える図式が独特。絵本の出版社が数多くある理由でもある。電子メディアの時代になってもページをめくることの魅力は絵本ならではのものだ。

佐藤：本の面白さを求めてデジタルメディアもページを擬似的に実現させている。環境問題から紙媒体に厳しい状況もある。本とiPadを共に触ることが普通にある今、紙＝アナログは成立しない。子どもに絵本を触らせたい人がいれば絵本は残るし買わずに自分でつくる人も出て来るだろう。可能性は出て来る。

宮崎：今、最終的に出現する表現方法はフレキシブル。根源的な感覚をまず礎として持つ事ができれば絵本が無くなる事はないだろう。申明浩氏：皮膚感覚でこそ感じるものがある。改めてメディアを見直し時代に対応しながら絵本を守っていく。

千葉敬愛短期大学久保木健夫氏：子供からの脱出を促す絵本制作指導という報告があった。デザイン同様に絵本も対象年齢ごとに考えていくことはないのか。

佐藤：絵本を一冊丹念につくりあげることで幅広くデザインについて必要なことを学べる。その上で課題では子供に伝えるメッセージという共通認識をもって制作している。

東京学芸大学正木賢一氏：個人化するマルチメディア時代、自分を肯定し支えるメディアづくりができなければならない。デザインが目的あつての表現ならば、それは人あつての行為であり常に自分に立ち返り評価をしていくもの。ナラティブデザイン、言葉、ストーリーを通じた伝達手段でどう伝えていくか。新たな感性をみつけ相互に主観を認識し合うメディアとして絵本の可能性は広がる。絵本づくりを通じ教育者が何を教育していかなければならないのかも見えてくる。

梅花女子大学香曾我部秀之氏：一般大学のアート教育から内なる自分の開放・感性の開放という言葉が、美術大学のデザイン教育から目的意識が必要・表現そのものに制限があるという言葉が出た。日本の美術・芸術教育は明治以降、制限の中で育てられて来た。がんじがらめの意識の中で成立してきた背景が美術大学には残って



いる。絵本は自分自身を開放するひとつの手段としてあるべきだ。表現することの意味を追究する過程で言語的な情報と視覚的な情報をミックスしていく手段こそが、自分自身の精神の開放につながる。大学における美術教育の一環として絵本制作が行われる場合の方法とその目的をこれからも考えて行きたい。

小林：大学で教えて1年、絵本の知識も無い。報告すること自体が良い機会になった。

佐藤：絵本は自身にとってデザイン教育・造形教育の中心的な題材。毎年発見があり方法論は使えない。絵本制作の取り組み方はそれぞれの大学の教育体系により様々だと思うが絵本学会はそれを包括的横断的に見ることができると言える機会。それを土台にできれば、未来の絵本についての展望ももっと明るく語れるようになっていくだろう。

宮崎：続けていくことが大切。今後も皆さんと共に考えて行きたい。コミュニケーションと表現メディア、美術教育の目的まで広く問うラウンドテーブルとなった。(文責：宮崎詞美)

■ラウンドテーブル 2

絵本を編集すること

話題提供者 細江幸世(フリー編集者)

澤田精一(フリー編集者)

コーディネーター 村中李衣(梅光学院大学)

絵本の奥付を見ると、多くの場合、文章を書いた作家の名前、絵を描いた作家の名前は記されているが、その絵本を担当した編集者の名前はないものです。しかし編集者なくしてこの絵本は現実のものとならなかったはずですし、そこにはなんらかの形で編集者の働きがあったはずで

す。1冊の絵本を現実のものとしていく制作の過程で編集者の役割は大きいのにその編集者の名前がないのは、編集者は黒子だからという言われ方で説明されてきました。しかし絵本を読んでいく中で編集者の判断や助言など、そうした働きによって絵本の表現そのものがより鮮明になっている例を知ると、絵本表現においての編集者の役割を理解することは絵本そのものの理解につながっていくはずで

す。こうした問題意識のもとに今回のラウンドテーブルが企画されました。しかし学問として絵本を研究する中で、編集者がどのように絵本の制作にからんでいるのかを知ることはいくつもの困難さが横たわっています。まず編集者は作家と対峙しますが、それは第3者が立ち入ることのない、いわば密室のできごとです。そのような編集作業は会議室だけでなく、駅の近くの喫茶店、あるいは電話、FAX、メールでのやりとりなど、そして作家と一緒に取材での出張もあるわけです。つまりさまざまな局面で編集者と作家は絵本を共に制作していきながら、その全容を記録することは不可能なのです。しかも再び編集者と作家がもう1冊の絵本をつくるとなったら、その編集過程はまた別のものであるはずで

す。このように編集者がどのように働いているかは、常に1回限りのことであり、保存ができず、それゆえ再現もできない。そして



それ以上に担当する編集者が変わればその手法も異なり、判断もまた違っていきます。

ということで編集者の役割を水準化することには非常な困難さがつきまといまいます。しかも1人の編集者にしても、人事異動などで違う分野の絵本を編集することもあって、その編集者がどのような問題意識をはぐみながら成長していったかという歴史をたどることもまた困難なことです。現在、何人もの著名な編集者が編集者論を出版して編集者の役割を明らかにしようとしています。が、だいたいは趣旨に反しての自慢話か、あるいは誠実に編集の役割を一般化しようとしたために作家との具体的なやりとりが欠落し、編集そのもののダイナミックな現場の様相が見えにくいということがほとんどです。

そこで出版社に勤務して絵本を編集してきた澤田と、出版社で編集に携わった後、フリーランスの立場で絵本に関わってきた細江幸世によって、1冊の絵本の裏で編集者がどのように働いてきたかを語りました。これは個々の話なので、内容は極めて具体的で、文章にして残すには憚れる面がありここには再録しませんが、たぶんこのような事例を集めることによって編集者の役割がおぼろに見えてくるのではないのでしょうか。そしてたぶんこのような追求によって「編集という側から見た絵本」というあらたな絵本についての問題が提起され、絵本学の対象となっていく可能性が現れてくるのかなと思いました。(文責: 澤田精一)

■ラウンドテーブル3

宮沢賢治と芥川龍之介—絵本にみる祈りとかげ—

話題提供者 小林敏也(絵本作家)
関口安義(都留文科大学名誉教授)
コーディネーター 中川素子(文教大学)

「宮沢賢治と芥川龍之介 絵本にみる祈りとかげ」は、二人の文学者を宗教的に読み解くことを目的にしたわけではないが、どこかで仏教系の大正大学にふさわしいものになればとの思いで選んだテーマである。宮沢賢治は、法華経信者だが、聖書も読みこなしている。芥川龍之介も、キリスト教に精通している。東日本大震災の前に決めていたテーマだが、宮沢賢治が岩手出身というだ

けでなく、みんなの幸せを願っていた二人の気持ち、震災後の日本にふさわしいようにも感じた。

パネラーにお願いしたのは、日本近代文学研究者の関口安義先生と絵本作家の小林敏也さんである。都留文科大学名誉教授の関口先生は、早稲田大学大学院を修了され、「芥川龍之介」(岩波書店)や「芥川龍之介とその時代」(筑摩書房)など芥川研究者として名高いが、「賢治童話を読む」(港の人)など宮沢賢治研究にも詳しい。また夏目漱石の女婿の松岡燮、「ジャン・クリストフ」などフランス文学の名訳者として知られる豊島与志雄、児童詩の北原白秋、「キューボラのある町」の早船ちよなど、日本近代文学者の評伝を次々に出され、現在は無教会主義を唱えた矢内原忠雄に取り組まれているとのこと。一人一人の作家論はもちろんのことだが、それを通して近代知識人たちの精神史、思想史を明らかにしようとなさっているのだ。

「宮沢賢治と芥川龍之介というまったく異質の二つの個性をぶつけてみると、そこに近代の知識人の問題が浮上する。二人とも弱者とされる愚かな人物に目を向け、無知ゆえの幸福な生き方<神聖な愚人>に憧れた。賢治も龍之介も日本の文学伝統から生まれ、日暮れから始まる物語が多い。個をこえて幸せを求め二人の求道の志は、シンクレティズムの傾向を示している。また二人とも不条理の物語が多い。作品から帰納されるのは、人間の<罪>の問題である。賢治には生存悪、押し詰めれば<原罪>ともいえるものとの闘いを描いた作品が多い。「よだかの星」のよだかは他の鳥にいじめられる被害者であるが、同時に羽虫などを捕食する加害者でもある。生きていくためには罪をおかさざるをえない。龍之介も罪との闘いを鮮明にするが、世界全体が幸福にならないうちは個人の幸福はありえないとする考えは、同時代の知識人に共通するものだ。東日本大震災後に、賢治の「雨二モマケズ」の詩に光があてられているが、こういった志が今の私たちを勇気づけてくれるように思う。」と広い視野で語られるお話は、先生の力強い声とともに心に響いた。

小林敏也さんは、東京芸術大学を卒業し、画本宮沢賢治シリーズ15冊と他5冊の賢治本(パロル舎版)を出され、第13回宮沢賢治賞を受賞されている。受賞時に産経新聞に書かれたエッセイ「宮沢賢治と私」を読んでくださったが、とても味わい深かった。「幼少のころ『石コ賢さん』とよばれるくらいひとり遊びをしていた賢治のたましいが紡いだ童話が、コロコロしてた胸の箱に共鳴した。彼の『ことば』という絵を『絵』ということばでおきかえればよかった。それはまるで彼が自分の童話が絵本になることを想定していたかのようだ。」

小林さんは、「風の又三郎」は油絵、「猫の事務所」は鉛筆画などさまざまな技法を使っているが、「どんぐりと山猫」「オッペルと象」「やまなし」など、色をつけたスクラッチボードをスクラッチペンでひっかいて描いたスクラッチの技法によるものが多い。見本を会場内に回しながら、ペンの種類と線との関係などを説明し

てくださった。

小林さんの特徴は、イラストレーションのみでなく、グラフィックや印刷技術をも視野に入れた絵本作りをなさっていることだ。深みのある微妙な色は、インクを組み合わせで作った色で、特色刷りといい、「印刷機というプレス機で版画をすればよい」と版画のように一色づつ重ねて刷っている。知的な構成力が伺えるが、絵本でなく<画本>と名付けているのは、大人も楽しめる本を意味してとのこと。「絵本は子供のためだけのものじゃない、子供も読める大人の本でもある。」という言葉に同感される方も多いことだろう。

小林さんは、青梅市に山猫あとりを営まれ、手紙にはいつも「山ねこ拝」と書かれている。スライドをプロジェクターで白い壁に映し出す幻灯会もそうだが、賢治ワールドに私たちをワープさせてくれる小林さんは、やっぱり山ねこかな。

私は、主に芥川の「蜘蛛の糸」について話した。物語の絵本化は、絵本作家がテキストをどう読み取り絵画化しているかというだけでなく、より広い意味での思想や伝統の解釈、また絵本のあり方で考えなければならない。「蜘蛛の糸」では、極楽と地獄という対位的な二つの世界と、その距離感を表す絵本のあり方が印象的である。釈迦がくもの糸を極楽から下の地獄へたらし、悪人カンダタが蜘蛛の糸につかまり地獄から上の極楽へと登る。物語、絵本とも俯瞰と仰視の視点がとられている。バロック時代、反宗教改革のカトリック教会でも仰視による天井画が多い。物語の筋や動きに導かれた視点というよりも、二つの世界の存在そのものとして、俯瞰と仰視の視点がとられているのだ。参考に俯瞰視点の意味するものについて、新宮晋さんの絵本「小さな池」についての拙文(朝日新聞、1999,4,14)もお配りした。

芥川は、釈迦のすむ浄土を<極楽>としているが、極楽は阿弥

陀の浄土であり、釈迦の浄土は靈山浄土である。須弥山世界は、上下で説明されるが、浄土は東西南北の方向性で説明されるので、芥川は間違った浄土理解のもとに、この話を作っているようだ。しかし、分科会ではあくまでも芥川の物語どおりにすすめた。私は、この上下をつなぐ物語に何故、縦開き絵本がないのかと話したが、野田好子さんが描いた日本仏教保育教会／編の「くものいと ことものくに仏教名作絵本」(すずき出版)が縦開きで出ているとのこと。

サザエさんの漫画で泥棒など悪人を表現するのに髭が描かれていると朝日新聞で読んだばかりだが、カンダタにも髭をはやした絵本が多い。また、地獄の表現に12世紀末の地獄草紙が、極楽浄土の風景に平等院鳳凰堂がなど、絵本の絵と伝統文化とのつながりも確実に感じられることなども話した。

芥川作品で絵本となっているものは「蜘蛛の糸」「杜子春」「トロッコ」「河童」「鼻」「魔術」など8作品しかないが、宮沢作品は視覚的要素が強いためか、多くの作品が絵本化されている。分科会参加者には宮沢賢治の絵本リストをお配りした。また教室内に私がもっている宮沢賢治の絵本を30冊ほど並べた。片山健、斎藤義重、近藤弘明、中村道雄など異なる画家、異なる出版社の絵本を並べたので、皆さんが興味深そうに見ていらした。また、シャウマン先生がドイツで買われたという縮緬本の「蜘蛛の糸」をもってきてくださり、見せてくださった。

二人の文学者の絵本は、絵本研究者だけでなく、文学研究者と共に考えることにより、深まるように感じた。関口先生、小林さん、参加者の皆さま、分科会を支えてくださった大会実行委員の皆さま、大正大学の学生の皆さん、ありがとうございました。

(文責中川素子)



絵本学会第14回定期総会

日時: 2011年6月11日(土) 17:30~16:30

場所: 東京都 大正大学

議長: 藤本朝巳 書記: 杉浦篤子

出席者: 50名 委任状提出者: 123名

1. 開会の辞

香曾我部秀幸事務局長より開会の辞が述べられた。

議長・書記選出

議長に藤本朝巳氏、書記に杉浦篤子氏が選出された。

2. 会長挨拶

中川素子会長より、第14回定期総会にあたり挨拶が述べられた。

3. 2010年度活動報告

中川素子会長および各委員会より2010年度活動報告(案)に基づき下記のような2010年度活動報告がなされ、承認された。

◎第13回絵本学会大会の開催(中川会長)

2010年5月3日(月・祝)、4日(火・祝) フェリス女学院大学 緑園校舎

テーマ「絵・ことば・音」 参加者332名

基調講演に谷川俊太郎さんを迎え、なかがわひろたかさんがゲストとして加わりなごやかなかに終わった。

◎企画委員会の活動(杉浦委員長)

・絵本フォーラムの開催

①2010年10月9日(土) 藤女子大学花川校舎(北海道石狩市)

テーマ「絵本の原点をさぐる—絵本における文(文章)の役割とは」 参加者30名

②2011年1月30日(日) 山形大学(山形市) 参加者56名

講師として画家であり絵本作家のさいとゆふじ氏を迎えた。

◎紀要編集委員会の活動(石井委員長)

・絵本学会研究紀要『絵本学』第13号の刊行

論文作成において、文章量が多くなる傾向にあり、今後どのようにすべきかを検討していく。

・2010年度絵本参考文献目録(09年9月~10年8月)の作成

◎機関誌編集委員会の活動(藤本委員長)

・機関誌『絵本BOOK END 2010』の刊行

赤羽末吉生誕100年の記念号としたことからか、売れ行きが良い。

・機関誌『絵本BOOK END 2011』の発行準備

◎研究委員会の活動(永田委員長)

・研究会の開催

2010年10月9日(土) 日本女子大目白キャンパス新泉山館2F 会議室

テーマ「絵本研究の方法 絵本の構造論」

講師: 中川素子絵本学会会長 ゲストスピーカー: パーサンズレン・ポロルマー氏

参加者 50名

・絵本研究助成(2件 各3万円)

「戦後絵本史における『こぐま社』絵本研究」(「こぐま社の絵本」研究会 廣田真智子(代表)、中川亜佐美、西脇由利子、丸尾美保、万本光恵、渡邊万由美)

「日韓比較 絵本オノマトベ研究」(石井光恵 今田由香)

◎広報委員会の活動(今井委員長)

・『絵本学会NEWS』の発行 39号(5月)、40号(10月)、41号(2月)

・作家のリレーエッセーおよび学生のインタビュー記事を掲載している。

・HPの管理運営

◎他学会との連携(中川会長)

子どもの本 WAVE、JBBY、日本児童文学学会、日本イギリス児童文学学会、日本マンガ学会等との連携をしている。

◎入退会(香曾我部事務局長)

新入会者: 42名 退会者: 13名(3年間会費未納の3名、除籍者を含む)

4. 2010年度決算・会計監査報告

香曾我部秀幸事務局長より、資料「2010年度決算案」に基づき会計報告がなされた。

監査担当の竹迫祐子氏より、監査の結果適正と認める旨報告された。

審議の結果2010年度決算報告が承認された。

5. 2011年度活動計画

中川素子会長および各委員会より2011年度活動計画(案)に基づき下記のような2011年度活動計画が提案され、承認された。

◎第14回絵本学会大会の開催(中川会長)

2011年6月11日(土)、12日(日) 大正大学(東京都)

テーマ「絵解き・絵巻・曼荼羅と絵本」

会員が40数名増えている。第14回大会が順調に進められており、研究発表、作品発表など時間配分に工夫が見られる。

第15回大会の会場は熊本県山鹿市で開催される予定である。

◎企画委員会の活動(杉浦委員長)

・絵本フォーラムの開催

2011年4月23日(土) 日本児童教育専門学校(東京都)

テーマ「手作り絵本のススメ」 講師: つちやゆみ氏(絵本作家) 参加者30名

◎紀要委員会の活動(石井委員長)

・絵本学会研究紀要『絵本学』第14号の刊行

第14号紀要原稿募集記事を『絵本学』第13号に同封した。尚、文章量について確認のこと。

・2011年度絵本参考文献目録(10年9月~11年8月)の作成

◎機関誌編集委員会の活動(藤本委員長)

・機関誌『絵本BOOK END 2011』の刊行

アンデルセン賞受賞者の特集を計画中

震災に関する特集についても検討中

・機関誌『絵本BOOK END 2012』の発行準備

◎研究委員会の活動(永田委員長)

・研究会の開催 2011年 7月 10日(日) 大阪府立中央図書館大会議室

公開インタビュー・研究講座 定員 70名

「せとうちたいこさんの絵本作家・長野ヒデ子さんに聞く」

・絵本研究助成(2件・各3万円) 助成募集記事は『絵本学』第 13号に同封した。

◎広報委員会の活動(今井委員長)

・『絵本学会 NEWS』の発行 年 3回の予定

学生会員を増やしたということも有り、学生による作家インタビュー記事を継続したい、この人をということがあれば手を挙げていただきたい。

・HPの管理運営

◎他学会との連携(中川会長)

子どもの本 WAVE、JBBY、日本児童文学学会、日本イギリス児童文学学会、日本マンガ学会等との連携推進

◎理事・監事の改選・役員の選出 2012年 2月～ 3月(香曾我部事務局長)

会員による選挙を行い、3月末までに理事および監事を選出する(2012年度総会において承認)。新理事会において、新会長、事務局長、専門委員会委員長を選出する。

6. 2011年度予算について

香曾我部秀幸事務局長より、資料「2011年度予算案」に基づき、説明がなされた。

審議の結果、原案通り承認された。

7. その他

・学生会員会費減額について諮られた。

かねてより学生会員にとって学会員であるメリットは何かということが言われてきた。また学生にとって 4,000円は高いのではないかとも言われてきた。そのため、年会費を 4,000円から 2,000円へ減額する旨諮られ、承認された。

8. 閉会の辞

藤本朝巳議長より閉会の辞が述べられた。

■ 絵本学会 2010年度収支 決算

2010年 4月 1日～ 2011年 3月 31日

科目	予算額	決算	増減	備考
I 事業活動収支の部				
1. 事業活動収入				
①受取会費収入	3,540,000		3,316,000	224,000
賛助会員	300,000		260,000	40,000 20,000× 13口(現在 13団体)
正会員	3,200,000		3,048,000	152,000 8,000× 381名(のべ人数)
準会員	40,000	8,000	32,000	4,000× 2名
②事業収入	200,000	422,400	-222,400	
研究活動事業収入	50,000	54,000	-4,000	
フォーラム収入	40,000	42,000	-2,000	入場者収入
研究講座収入	10,000	12,000	-2,000	
出版事業収入	150,000	368,400	-218,400	『絵本 BOOK END 2010』他
③雑収入	130,500	131,338	-838	
受取利息収入	500	162	338	
入会金収入	80,000	84,000	-4,000	入会金 2000× 42名
雑収入	50,000	47,176	2,824	出版物在庫販売など
事業活動収入合計	3,870,500	3,869,738	762	
2. 事業活動支出				
①事業費支出	2,010,000	1,600,691	409,309	
人件費支出	300,000	300,000	0	
事務局報酬支出	300,000	300,000	0	事務局賃金等
事業費支出	1,710,000	1,300,691	409,309	
消耗品費支出	30,000	5,645	24,355	
印刷製本費支出	800,000	795,645	4,355	
絵本学会ニュース	200,000	252,000	-52,000	39,40,41号
研究紀要	450,000	415,170	34,830	『絵本学』 12号
会員名簿	100,000	88,000	12,000	
その他	50,000	40,475	9,525	封筒印刷等
通信運搬費支出	300,000	147,321	152,679	ニュース等発送費・通信費
旅費交通費支出	500,000	305,840	194,160	理事旅費等
会議費支出	10,000	3,200	6,800	
広告費支出	50,000	30,000	20,000	
印刷物制作費支出	20,000	0	20,000	
HP更新作業費支出	30,000	30,000	0	
雑支出	20,000	13,040	6,960	振込手数料他
②活動費支出	720,000	763,351	-43,351	
大会運営補助金支出	300,000	299,514	486	ポスター等制作費を含む
専門委員会活動費支出	360,000	403,945	-43,945	
企画委員会	150,000	181,100	-31,100	フォーラム等
紀要委員会	50,000	50,030	-30	紀要編集等
機関誌委員会	50,000	50,960	-960	『絵本 BOOK END』編集
研究委員会	60,000	71,125	-11,125	研究会主催
広報委員会	50,000	50,730	-730	『絵本学会ニュース』編集

科目	予算額	決算	増減	備考
研究助成費支出	60,000	59,892	108	3万円×2
③出版事業支出	1,200,000	1,250,025	-50,025	【絵本 BOOK END 2010】
編集作業費支出	200,000	0	200,000	
制作費支出	1,000,000	1,250,025	-250,025	
事業活動支出合計	3,930,000	3,614,067	315,933	
事業活動収支差額	-59,500	255,671	-315,171	
II 投資活動収支の部				
1. 投資活動収入				
10周年事業資産金				
取崩収入	1,163,280			
投資活動収入計	1,163,280	1,163,280	0	
2. 投資活動支出				
0	0	0		
投資活動支出計	0	0	0	
投資活動収支差額	1,163,280	1,163,280	0	
III 財務活動の部				
1. 財務活動収入				
長期借入金収入	0	0	0	
財務活動収入計	0	0	0	
2. 財務活動支出				
長期借入金返済支出	0	0	0	
財務活動支出計	0	0	0	
財務活動収支差額	0	0	0	
IV 予備費支出				
	200,000	0	200,000	
当期収支差額	903,780	1,418,951	-515,171	
前期繰越収支差額	2,751,815	2,751,815	0	
次期繰越収支差額	3,655,595	4,170,766	-515,171	

■ 絵本学会 2011年度収支予算

2011年4月1日～2012年3月31日

科目	予算額	前年予算額	増減(予-決)	備考
I 事業活動収支の部				
1. 事業活動収入				
①受取会費収入	3,540,000	3,540,000	0	
賛助会員	300,000	300,000	0	20,000×15口(現在13団体)
正会員	3,200,000	3,200,000	0	8,000×400名(現在約420名)
準会員	40,000	40,000	0	2,000×20名
②事業収入	215,000	200,000	15,000	
研究活動事業収入	65,000	50,000	15,000	
フォーラム収入	35,000	40,000	-5,000	入場者収入
研究講座収入	30,000	10,000	20,000	参加費収入
出版事業収入	150,000	150,000	0	【絵本 BOOK END 2011】
③雑収入	130,200	130,500	-300	
受取利息収入	200	500	-300	
入会金収入	80,000	80,000	0	入会金2,000×40名
雑収入	50,000	50,000	0	出版物在庫販売など
事業活動収入合計	3,885,200	3,870,500	14,700	
2. 事業活動支出				
①事業費支出	1,880,000	2,010,000	-130,000	
人件費支出	300,000	300,000	0	
事務局報酬支出	300,000	300,000	0	事務局賃金等
事業費支出	1,580,000	1,710,000	-130,000	
消耗品費支出	30,000	30,000	0	事務消耗品費
印刷製本費支出	730,000	800,000	-70,000	
絵本学会ニュース	250,000	200,000	50,000	42,43,44号
研究紀要	430,000	450,000	-20,000	【絵本学】13号
会員名簿	20,000	100,000	-80,000	新入会追加分
その他	30,000	50,000	-20,000	封筒等
通信運搬費支出	250,000	300,000	-50,000	ニュース等発送費・通信費
旅費交通費支出	500,000	500,000	0	理事旅費等(理事会4回/年)
会議費支出	10,000	10,000	0	
広告費支出	50,000	50,000	0	
印刷物制作費支出	20,000	20,000	0	
HP更新作業費支出	30,000	30,000	0	
振込手数料	15,000	0	15,000	
雑支出	10,000	20,000	-10,000	

科目	予算額	前年予算額	増減(予-決)	備考
②活動費支出	785,000	720,000	65,000	
大会運営補助金支出	300,000	300,000	0	ポスター等制作費を含む
専門委員会活動費支出	425,000	360,000	65,000	
企画委員会	150,000	150,000	0	フォーラム等
紀要編集委員会	55,000	50,000	5,000	紀要編集等
機関誌編集委員会	60,000	50,000	10,000	『絵本 BOOK END』編集
研究委員会	100,000	60,000	40,000	研究会主催
広報委員会	60,000	50,000	10,000	『絵本学会ニュース』編集
研究助成費支出	60,000	60,000	0	2団体
20周年事業支出	0	0	0	
③出版事業支出	1,200,000	1,200,000	0	『絵本 BOOK END 2011』
編集作業費支出	200,000	200,000	0	
制作費支出	1,000,000	1,000,000	0	
事業活動支出合計	3,865,000	3,930,000	-65,000	
事業活動収支差額	20,200	-59,500	79,700	
II 投資活動収支の部				
1. 投資活動収入				
10周年事業資産金取崩収入		1,163,280	-1,163,280	
投資活動収入計	0	1,163,280	-1,163,280	
2. 投資活動支出				
投資活動支出計	0	0	0	
投資活動収支差額	0	1,163,280	-1,163,280	
III 財務活動の部				
1. 財務活動収入				
長期借入金収入	0	0	0	
財務活動収入計	0	0	0	
2. 財務活動支出				
長期借入金返済支出	0	0	0	
財務活動支出計	0	0	0	
財務活動収支差額	0	0	0	
IV 予備費支出				
当期収支差額	200,000	200,000	0	
前期繰越収支差額	-179,800	903,780	-1,083,580	
前期繰越収支差額	4,170,766	2,751,815	1,418,951	
次期繰越収支差額	3,990,966	3,655,595	335,371	

■ 財産目録

2011年3月31日現在

科目	金額	
I 資産の部		
1. 流動資産		
現金預金		
現金手元有高	11,593	
普通預金 りそな銀行高槻支店	1,093,391	
定額貯金 高槻天王郵便局	2,000,000	
絵本学会振替口座	401,382	
次年度仮払い金(大会運営補助金)	300,000	
未収金	368,400	
流動資産合計	4,174,766	
資産合計	4,174,766	
II 負債の部		
1. 流動負債		
預かり金(年会費差額の過徴収分)	4,000	
流動負債合計	4,000	
負債合計	4,000	
正味財産	4,170,766	
	次年度繰越金	4,170,766
	計	4,170,766

研究委員会から

《公開インタビュー》

「せとうちたいこさんの絵本作家・長野ヒデ子さんに聞く」

第1部 公開インタビュー

語り手：長野ヒデ子さん／インタビュアー：巽真理子さん

第2部 参加者による討論会

日時：2011年7月10日(日) 13:00～15:45

会場：大阪府立中央図書館 大会議室

参加者：一般：26名 学生：6名 会員：9名 計：41名

第1部の公開インタビューは、初めての出会いにもかかわらず、楽しいインタビューになりました。冒頭10分ほどで、巽さんが、ご自身の元気度の推移を示したグラフを通して、研究テーマ(育児に於けるジェンダー)にたどり着いた概略を述べ、自己紹介をしました。加えて巽さんは、本会が研究会であるという点を踏まえて、アクティブ・インタビュー(インタビュアーが、積極的に話題に関与する方法)によって、語り手とインタビュアーによる、ナラティブ=物語を作るという、インタビューの方法論を示しました。時間的制約と公開であるという点から、十分なナラティブの成立には至りませんでした。長野さんが違和感なく応答されている様子が伝わり、公開インタビューは成立しました。

第2部の討論会は、会員の参加が少なかったことを大きな理由として、絵本研究の方法を話し合うという方向には進みませんでした。絵本を介して子どもの居場所を作るという、重要な問題は話し合われましたが、司会進行の力不足もあり、本来の意図が伝わらなかったようです。研究活動を行っている会員の中にも、「愛好者」と表現する方もあり、「議論する」という研究の基本が理解されていないようです。この点が、絵本学会の大きな特徴であり、今後も、このような会を積み重ねることの必要性を感じました。

一般参加者に関しては、長野ヒデ子さんのご尽力におうところが大きく、研究会後に入会希望者が出ています。大会以外の催しとして、絵本学会主催のフォーラムなどを通して、絵本作家さんなどと触れ合う機会を各地で展開することは、新たな会員獲得のためにも有効なようです。以上を、2011年度絵本研究会の報告とします。

《研究助成》

本年度の絵本研究に対する研究助成(1件3万円で2件)の募集に、下記の応募があり、助成を決定いたしましたのでお知らせします。

1) 研究テーマ： 戦前における「ツバメノウチ」の研究

研究構成員： 棚橋美代子(代表)、松崎行代、久保昌子、山田千都留、濱崎由起、内山三枝子、向平知絵、糸井嘉、中村綾

研究の概要： 昭和2年に刊行され、現在も出版されている月刊保育絵雑誌「キンダーブック」の研究を行う。今回はその概要を明らかにすることを目的としており、子ども・保育士・母親の各々を対象にしていると思われる内容を検討する。

発表の形態：絵本学会大会で報告を行い、その後紀要に発表したい。

2) 研究テーマ： Beatrix Potter の The Tale of Peter Rabbit 初版本のドローイングの研究

研究構成員： 藤本朝巳、竹内美紀、永井雅子、赤羽尚美、中山美加(全員会員)

研究の概要： 初版本に用いられた原画(フェリス女学院所蔵)と出版された絵本との比較を通して、絵本化の際の工夫を読み取る。

1) 解説書の翻訳 2) 原画の取り込み(データ化する)
3) 原画と絵本の比較検討 4) 研究結果の文章化 5) 発表

発表の形態： 絵本学会大会で報告を行い、その後、大学又は大学院の紀要、或いは冊子にて発表。

企画委員会から

絵本フォーラム 2011

「手作り絵本のススメ」

2011年度の絵本フォーラム「手作り絵本のススメ」は4月23日(土)、10:00～16:00まで、高田の馬場にある日本児童教育専門学校で開催いたしました。

絵本フォーラムの絵本制作のワークショップも3回目になりました。

3月11日に起こった東日本大震災の余震が続く中、東京会員の加賀美裕子さん、講師の土屋侑実さんが自から準備を進めてくださり、雨にも関わらず、教室の定数である30名の方が集まりました。今回の講師は絵本作家であり、絵本学会会員のつちやゆみ氏にお願いしました。

・午前 10:00～12:00

絵本制作—まず、絵本の形を作ってしまうところから始めました。B4カラーケント紙1枚、B4ケント紙4枚、表紙となるケントボード、布テープ、両面テープ、糊、はさみ、クリップが材料です。これでハードカバーで8枚のページを持つ絵本が出来ることになります。材料はその大きさに切り揃えてくれてあり、参加者はそれを組み合わせさせていきました。

・午後 13:30～16:00

午後は出来上がった本の形を絵本にしていきます。アクリル絵の具でデカルコマニーにも似ているのですが、絵の具を自由に延ばして、ひっかく、混ぜ合わせるなどの作業で、不思議な画面を描くことをし、一人一枚の色紙をつくります。デザインを考えながら、物語を構成しながら、コラージュをしていきました。手作り絵本に慣れているかたが多かったようで、傑作が次々と生まれていきました。

雨、余震の心配もあり、委員の方が、作業が早く進むように計らってくださったおかげで1時間早い、15:00には作業終了となりました。その日は大きな揺れもなく、ほっといたしました。参加してくださった方々、準備、運営してくださった方々に心からお礼を申し上げます。(杉浦篤子・企画委員)

事務局からのお知らせ

■ 役員選挙のお知らせ

理事・監事の選挙があります

●理事、監事の候補者をご推薦ください●

○自薦・他薦可、何名でもかまいません。

○はがきか封書で絵本学会事務局選挙管理委員会まで郵送してください。メールやファックスは不可。

○締め切りは 2月 4日(土) 必着。推薦する人と推薦される人の名前を明記してください。

・任期は 3年。理事 10名の内 7名は正会員の選挙で任命されます。3名は会長の推薦で決まります。

・選挙による理事候補者は 70歳を超えない会員となっておりますので、ご推薦の際はご留意ください。

・理事を直前に連続 2期続けた会員(永田桂子理事)は、今回の選挙では候補者とはなれません。

・監事は、任期や年齢の制限がありません。

●候補者を決定して以後の選挙日程●

○選挙管理委員会が、推薦された候補者の名簿を作成します。

○2月 20日(月) までに名簿と投票用紙を会員に発送します。

○3月 17日(土) 必着で投票用紙を返信用封筒に入れて郵送で投票してください。

○選挙の結果は、絵本学会ホームページと「絵本学会 NEWS」45号(2012年 5月発行予定) で公表します。

○選出された新理事(候補)の互選によって会長(候補)が決定し、会長(候補)推薦による事務局長(候補)と 3名の理事(候補)を含む新理事会は、6月の総会で会員の承認を経たうえで、正式に発足します。

★2012年 6月の総会までは、現役員が業務を担当します。

理事選出規則

1. 理事は、10名の内 7名は正会員の中から正会員の選挙によって選出される。会長は理事会の推薦を得て、さらに 3名の理事を任命することができる。

2. 理事候補者は、選挙の 1か月前までに自薦、推薦によって選挙管理委員会に届け出を行なう。

3. 理事候補者は 70歳を越えない者とする。但し、会長によって任命される 3名の理事は、その限りではない。

4. 理事の選挙は、7名を連記し郵送によって行う。

5. 選挙および会長任命によって選出された理事は、総会の承認を得て決定する。

監事選出規則

1. 監事は、正会員の中から正会員の選挙によって選出される。

2. 監事候補者は、選挙の 1か月前までに自薦、推薦によって選挙管理委員会に届け出を行なう。

3. 監事の選挙は、2名を連記し郵送によって行う。

4. 選挙によって選出された監事は、総会の承認を得て決定する。

第2回 絵本学会理事会 議事録

日時: 2011年 6月 11日(土) 9: 30 - 12: 00

会場: 大正大学 5号館 3階人文学科研究室 1

出席者: 中川素子(会長)、香曾我部秀幸(事務局長)、石井光恵、今井良朗、今田由香、大橋真由美、杉浦篤子、永田桂子、長野ヒデ子、藤本朝巳、シャウマン・ヴェルナー(今回大会実行委員長)

議長: 中川会長

○報告事項

1. 会長挨拶

2. 第 1回理事会議事録の確認

3. 第 14回絵本学会大会について(大会実行委員長)

大会の流れの説明があり、会員は 115名の参加申込があったこと、委任状は 108通届いたことが報告された。

4. 各委員会報告

1) 企画委員会

4月 23日(土) に日本児童教育専門学校にて絵本学会フォーラム「絵本作りのススメ」を開催した。参加者は 30名(うち会員は 5名)。

2) 紀要編集委員会

・大会に参加する会員には、第 13号を受付で配布する。

・次号紀要第 14号の募集要項はチラシを作成し、第 13号配布・送付の際に会員へ報告する。

3) 機関誌編集委員会

・「絵本 BOOKEND」はこれまでと同様、朔北社で出版する。

・次号は国際アンデルセン賞受賞者の特集を予定している。

4) 研究委員会

・7月 10日(日) 大阪府立中央図書館にて「長野ヒデ子さんの公開インタビュー」を行う。

後援の財団法人大阪国際児童文学館を通して大阪府の公共図書館へチラシを配布していただいた。

・研究助成金申し込みのお知らせをチラシにし、第 13号配布、送付の際に会員へ報告する。

5) 広報委員会

・学生を巻き込んだ「NEWS」の誌面づくりをすることで、学会の活動を活性化することになると考えるが、「NEWS」掲載の学生インタビューの申込がないため、広く告知することが必要。

・ホームページに「研究」欄を掲載し、充実させる方向で考える。

○審議事項

1. 会員の入退会の承認(敬称略)

新入会員: 土井あゆみ、久保田健一郎、今井典子、柴田哲谷、鈴木千春、石津由美、鉢呂光恵、中村綾、久保昌子

退会者: 大西玄一郎、橋本久美、伊藤順子、和田和歌子、梨本電子

2. 第 14回絵本学会大会定期総会議案について(別紙)

・決算案・予算案を確認し、総会において予算案提案の際に、学生会員の会費を 2,000円にする改正案を提案する。

・各委員会の活動内容の報告について、各委員会の委員長からおこなうことを確認した。

3. 機関誌の執筆の対象にかかる本誌寄贈について(再議・中川会長)

・執筆者へ寄贈するほか、寄贈先を改めて審議する必要がある。広報で使用するには事務局から発送している。

・機関誌を学会が朔北社より購入する場合の価格を次回の契約で明記するようにする。

・学会の発送物にチラシを同封する場合、会員からの依頼であれば原則的に同封する。

4. 第15回絵本学会大会について(「風吹きカラス」メンバー、会議に参加)

次回大会は熊本県で絵本の読み聞かせなどの活動をされている団体「風吹きカラス」が大会実行委員会となり、熊本県山鹿市の八千代座で開催することが決定された。

日程の第一候補は2012年5月26日(土)、27日(日)、第二候補は6月2日(土)、3日(日)。

(事務局註: 後日6月2日(土)、3日(日)に決定)

5. その他

・学会への寄贈本について(事務局より)

学会への寄贈本は、これまで事務局の所属する大学へ寄贈している。その報告は「NEWS」各号へ掲載している。今後もその例を踏襲することが承認された。

・今後、東日本大震災被災地への支援活動を長期的な視野で検討する。

次回理事会の日程は、大会終了後、事務局より各理事の都合を聞いて、決定する。

(その結果、2011年9月24日(土)13:30から、日本女子大学児童学科会議室で開催することが決定された。)

第3回 絵本学会理事会 議事録

日時: 2011年9月24日(土) 13:30-16:30

会場: 日本女子大学児童学科会議室

出席者: 中川素子(会長)、香曾我部秀幸(事務局長)、石井光恵、今井良朗、今田由香、杉浦篤子、永田桂子、長野ヒデ子、藤本朝巳、シャウマン・ヴェルナー(第14回大会実行委員長)、大坪恵理子(第15回大会実行委員会事務局長)、勸角幸子(第15回大会実行委員会)

欠席者: 大橋真由美

議長: 中川会長

○会長挨拶

○報告・審議事項

1. 第14回大会報告(シャウマン・ヴェルナー大会実行委員長)

・第14回大会(6月11・12日、於・大正大学)について報告があり、収支決算報告書が示された。

・残金について、いったん学会会計に繰り入れた上、東日本大震災関連のしかるべき機関に寄附することが承認された。

2. 第15回絵本学会大会の計画について(大坪恵理子大会実行委員会事務局長)

・2012年6月2日(土)・3日(日)の2日間、熊本県山鹿市八千代座(重要文化財)を主会場として開催する。

・山鹿市教育委員会の協力・後援が得られることとなった。

・大会実行委員長に長野ヒデ子理事が就任した。

・大会のテーマは「絵本からはじまる・絵本からつながる」とする。

・初日のメインイベントとして、「絵本の演劇性」をテーマに、絵本作家を中心とした文士劇を企画。

・全体のタイムテーブル等を調整中である。

以上の事柄について、報告があり、審議・承認された。

○報告事項

1. 第2回理事会議事録の確認

2. 各委員会報告

1) 企画委員会(杉浦企画委員長)

・2011年度絵本フォーラム「手づくり絵本のススメ」(4月27日開催、於・日本児童教育専門学校)の収支決算について。

・本年度のフォーラムはこれで終了の予定であるが、もし第2回を開くとすれば、札幌で小規模なものとなる。

以上の事柄について、報告があった。

2) 紀要編集委員会

・9月末日の原稿投稿の締め切りを待って、査読作業に入る。

3) 機関誌編集委員会(藤本編集委員長)

・株式会社朔北社との『絵本 BOOK END』の制作・発売委託に関する契約の改正について。

学会への献本数(現在600部)を、「会員数の増減によってその都度見直す」旨、改正交渉する。

・『絵本 BOOK END 2011』の編集・発行の進捗状況について。

以上の事柄について、報告があった。

4) 研究委員会

・2011年度絵本研究会「公開インタビュー 絵本作家・長野ヒデ子さんに聞く」(7月10日、於・大阪府立中央図書館)の開催結果について。

・2011年度絵本研究助成金について以下の2件の申請があり、助成が決定した。

1) 戦前における「ツバメノウウチ」の研究(代表: 棚橋美代子)

2) Beatrix PotterのThe Tale of Peter Rabbit 初版のドローイングの研究(代表: 藤本朝巳)

以上の事柄について、報告があった。

5) 広報委員会

・「絵本学会 NEWS」は10月中旬の発行を目指して、編集作業中

である。

・ホームページに「研究」欄を新たに設ける際、その内容を次回の理事会で検討する。

以上の事柄について、報告があった。

3. その他

・「静岡文化芸術大学主催 ユニバーサルデザイン絵本コンクール 2011事業」に、絵本学会が後援することが、事務局より報告された。

○審議事項

1. 会員の入退会の承認(敬称略)

新入会員：趙崢一、甲斐聖子、村松麻里 吉島紀江、村岡益子、清水百合香、糸井嘉、鈴木宏枝、綱美恵、遠藤康弘、滝口瑞穂、成田直子、久保敬、佐野之美

2. 次期役員選挙について

以下のことが決定された。

1) 選挙管理委員会について

事務局にて選挙管理委員 3名の人選を行い、委員会を設置する。

2) 理事・監事候補者の推薦受付(自薦/他薦)の日程

10月発行の「絵本学会 NEWS」43号で公示し、2月 4日(土) 必着締め切りで、はがきまたは書面によって、絵本学会事務局選挙管理委員会宛に推薦の届出をする。

選出規則(候補者は選挙の1ヶ月以上前までに自薦・他薦により届け出。理事 10名の内7名は正会員の中から選挙にて任命。理事は3年の任期で、連続2期が限度。選挙による理事候補者は70歳を超えない者とする。監事に年齢や期限の制限はない)の確認。

3) 理事・監事の選挙

・選挙管理委員会は、推薦された候補者の名簿を作成する。

・2月 20日(月) までに、「絵本学会 NEWS」44号(12年 2月発行)と共に候補者名簿と投票用紙を発送する。

・会員は同封の返信用封筒を用いて 3月 17日(土) 必着で郵送投票する。

4) 新理事・新監事(候補)の確定

・3月 19日(月) に選挙管理委員会が投票用紙を開票し、その結果を絵本学会ホームページと「絵本学会 NEWS」45号(12年 5月発行)で公表する。

5) 会長候補、事務局長候補の選出

4月の旧理事による理事会の後に、新理事(候補)による理事会を行い、理事(候補)7名の互選によって会長(候補)を選出し、事務局長候補と会長(候補)任命分の理事候補(3名以内)を推薦する。その後、推薦された会員の了解を得て、新理事(候補)を決定する。

6) 新理事の役割分担(案)の決定、新旧役員の引き継ぎ

12年 6月の絵本学会大会開催時の新旧合同理事会にて、新理事の役割分担(案)の決定並びに新旧役員の引き継ぎを行い、新理事会を発足させる。

7) 総会による新役員の承認

2012年 6月絵本学会大会の定期総会で承認を得る。

なお、2012年 6月の総会までは現役員が業務を担当する。

3. その他

以下の事柄について決定した。

1) 機関誌の配分・寄贈について

・機関誌編集委員会に、編集業務(執筆依頼時の寄贈等)に利用するため、35冊配分する。

・会長および理事は、広報活動のため機関誌を各方面に寄贈することができる。

その配送事務は事務局より行う。

2) 次回の理事会は 2012年 1月 8日(月・祝)、日本女子大学児童学科会議室にて開催する。

●寄贈図書のお知らせ

2010年9月～ 2011年 9月の間に、以下の図書が絵本学会に寄贈されましたのでお知らせします。(到着順)

★ 国立国会図書館国際子ども図書館より

「平成 21年度国際子ども図書館児童文学連続講座講義録 いつ、何と出会うか～赤ちゃん絵本からヤングアダルト文学まで」(国立国会図書館国際子ども図書館 平成 21年)

★ 国立国会図書館国際子ども図書館より

「国際子ども図書館の窓」第 11号(国立国会国際子ども図書館 2011)

★ 日本イギリス児童文学会より

『英語圏諸国の児童文学Ⅰ 物語ジャンルと歴史』、『英語圏諸国の児童文学Ⅱ テーマと課題』(ミネルバ書房 2011)

ムーゼの森 軽井沢絵本の森美術館より

「2011年春の企画展 グリム童話の絵本展～ドイツをめぐるメルヘンの旅～」(軽井沢絵本の森美術館 2011) 35p.

■ 第 15 回絵本学会大会のご案内

第 15回絵本学会大会は、2012年 6月 2日(土)・3日(日)の両日、熊本県山鹿市「八千代座」(国指定重要文化財)で開催されます。

大会テーマ：絵本からはじまる、絵本からつながるプログラムなどは、次号ニュースでお知らせします。



むにゃむにゃ日記

あおきひろえ

6

○月△日

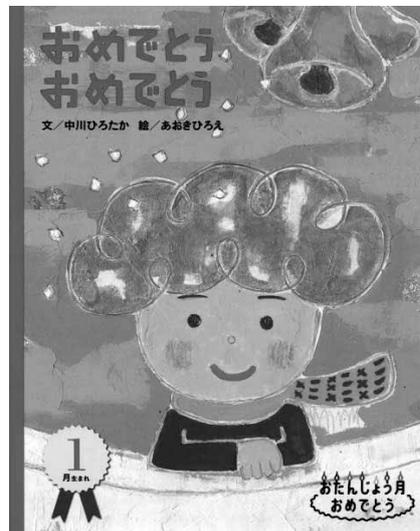
時計の針もそろそろ正午にさしかかろうか、という時間になるときまって、夫はお昼なんにする？と土間を挟んで向こう側にある自分の部屋から声をかけてくる。うちは自営業だし、この時間にランチとかを外に食べに行くといちばん混んでいるし、だいたいわたしはついさっきまで洗濯物とか掃除とか適当に片付けていて今！やっと筆がのってきたとこなのだ。わたしはほんとうはもうちょっと描きたい。でも、キッカリ 12時なのだ、この人は。悲しいかなサラリーマン時代に体内時計が出来上がってしまったんだろうな。ちなみに夕方5時半になるとキッチリ仕事を終えてビールを呑みだす。あ、そうそううちの夫というのは、絵本作家の長谷川義史です。

こうして、お昼は近所の店によくランチを食べに行く。この辺はおいしい店が回りにいっぱいあるし、なにより早朝の弁当作りからはじまって、育ち盛り三兄弟の胃袋を満たすために、相当な時間を食事作りに費やしているの、この頃、心底ご飯作りが嫌になるときがある。お昼くらい外食したいじゃないですか。それに案外この時間が夫婦のミーティングの時間にもなっていて、お給仕なくて良い分手際になり、いろいろな仕事の相談とか打合せができるチャンスでもある。

さて、このランチミーティングでなにを話しているかという、あべ弘士さんが長谷川を動物に例えると〇〇〇と言ったとか、担任の女先生の着ている服はいつもワンサイズ小さいんだ、とか、先ずくだらないネタを披露する。それから、長谷川のテキストの「はい、はくしゅ〜」というフレーズ、どっかで聞いたことあるなと思ったら、これはケロちゃんの絵本のフレーズだったということ自分で思い出して、どうしようかこれはマズいというので、咄嗟に「パチパチ〜」にしたら？とグッドアドバイスをしてあげた。こっちはこっちで、表紙に使う絵どれがいいと思う？と悩んでいると、一瞬にして！しかもプロの目で判断して「こっち！」と判断してもらえたりと、お互い重宝しあっている。



それが夫婦喧嘩をすると、バツリとランチに行かなくなるときもある。お昼は残り物でアバウトさっさとすませ、自分のいい時間に仕事も一段落つけられたりするが、ただ、困ったことにわたしは福龍園の担々麺が食べたくてしょうがなくなる。もう中毒なのだ。こじんまりし



た、お世辞にもきれいとは言えないこの店の担々麺がもう食べたくて食べたくて悶え始める。たぶん麺にシャブが練り込んであるんだと思う。だいたい喧嘩の原因は男が悪いので、こっちら謝る必要はないが、ひとりで店に入りにくいのでしびしび話しかけてなんとなく仲直りする。子はかすがい、ならぬ、うちでは担々麺はかすがいということになる。

×月×日

わたしが家事などに時間をとられてる間にも次々と名作が隣の部屋から生まれてくる。わたしはいつも上手だね、と褒める。どんどんいい仕事をするべきだ。なのに、たまに長谷川が海外旅行や自転車ツーリングなど仕事以外の遊びに出掛けるとホッと安堵している自分に気付く。どんどん遊びに行き、どんどん呑みにいってほしい。この気持ちをわかってもらえるだろうか。

歯ぎしりが過ぎて、犬歯が白のようになっているわたしが、長谷川義史の才能はだれよりも早く見出し、知っているのもわたしだ。才能のある人はそれだけで輝いているし、魅力がある。だから、結婚したようなものだ。

矛盾している正反対の人物が自分のなかに存在しているので気が狂いそうだ。

月○日

絵本をつくるとき、お話もじぶんで書く場合と他の人が書いたお話に絵だけを描く場合があるが、じぶんではそれが全く違うタイプの仕事に思える。

全部を自分でつくる場合はやり易い。つくりたいイメージに、編集者の意見なども取り入れつつひたすら近づけるのだ。他の人のお話をいただくと

先ずもって、難しい。いつもそうだが全然自分の世界とかけ離

れている気がしてしまうのだ。でも、売れない作家が選り好みをしている場合じゃない。このテキストが自分のものになるように何回もよんで噛み含めて、枕の下において寝る。(おまじない) そうしているうちに、このお話に絵だけで伏線となるお話を描けるんじゃないかという気がしてきて、そのうちアイデアがうまれてくる。このテキストには出てこないキャラクターを登場させたり、絵のなかだけの行動を起こさせたりする。こうなると、こっちのものとなり作業も楽しくなる。こうしてできたのが中川ひろたかさん作の『おめでとのおめでと』だ。わたしがどれだけふくらましたかを見てもらいたい。でもこれは、それほど懐の深いテキストであったといえる。

月×日

長谷川さんと合作でなにか、という話を2社からいわれている。1社は長谷川作わたしが絵。もう1社はわたしが作で長谷川が絵というのだ。どちらにしる、ふたりともあまりやる気がない。というのも長谷川は忙しすぎて、それどころではないようなので、自然にもうやってくれなくて結構ですよ、という気になる。忙しいのは誰よりもわかっているだけに、早死にしくなければゆっくりやって仕事を断ることもおぼえれば？とやっているくらいなので、「早くして」と言う気にならない、というわけ。いったい、どっちが先にできるんでしょうかね？というか夫婦合作絵本はできるんでしょうかね？

月○日

メールは便利だ。突然電話して、相手の時間をもぎ取るとをしないでいいし、会ったことのない人でも恥ずかしくない。仕事の打合せなどもほとんどメールですんでしまうことが多々あるが、最初から最後まですーっとメール、というのはどうかと思う。しかもそれがきょうびの若者、とかではなく、あきらかに自分より年上のおっさん編集者だったりすると、こっちもちょっとびっくりする。せめて電話で内容について微妙なニュアンスを伝えたいときもあるじゃないですか？おっさんだって恥ずかしいのかもしれないが、それが仕事でしょ。そして言いにくいことは部下に任せたりして、そのくせ打上げにはにこにこ顔で大阪まで新幹線でやってくる。ツイッターのフォロワー(?)に選ばれました的なメールもよこしたりして、なんでわたしが追跡せんといかんのか？これが恥ずかしがりのおっさんのすることか？わたしは首をかしげてしまった。ほんとにもう、この頃のおっさんは。

△月×日

大阪のある図書館から子育てについてなにかお話を、といわれるがそんな人様に自慢できるような子育てはしていない。どうやってうまく手抜きしながらやってきたか、という話ならできそう。父親の長谷川も自分のこどもに絵本を読んでやったことはほとんどない。あれだけ絵本を作って他所でおばちゃんに読んであげているのに。それを言うと、自分だって親に読んでもらったことは一度もない、と豪語する。人気絵本作家だって、そんなもんです。そういうわたしも読むには読んだが、いつも苦痛だった。その気持ちに通じるのか、うちの子はだれも親の絵本を見ないし、本自体嫌いで、国語の成績も悪い。ゲームやパソコンが大好きなしょうもない子どもになってしまった。子どものことにあまり一生懸命

になれない。自分のやりたいことを優先してしまう。そんなわたしが、なにを言う？わたしは正直に言うつもり。「あなたのほうが、ほんとうにすばらしいお母さん」

×月×日

絵本の仕事が暇なので、この頃落語を習いだした。歩いて5分で行ける『繁昌亭』ではプロの落語家が直



に教えてくれる。落語には全然関心がなかったが、一度かぶりつきで落語をみたとき、これは座布団1枚の小宇宙じゃないか！と感激。人物設定や場所も時間も演技ひとつで飛び越える最高級の演劇だ、ということに気がつき、それからじわじわと興味が湧いてきた。ただの笑い話のようで、そのなかにはどんな人物が人に好かれ、どんな振る舞いがかっこよくて、どう生きるのがいちばんいいかが見えないように描かれていて、ひたすら感銘を受ける。わたしは落語で阿呆を演じるのがいちばん楽しい。また、よくよくテキストを把握していくにつれ、文章の構成のすばらしさとか、言葉使い、言葉のリズムなど、どれもこれもよくできていて、本当に勉強になる。その話をある編集者にいうと、「あおきさんももう少し落語みたいにおもしろいストーリー書いてみて、いつも話に抑揚がなさすぎるんだよね」と、やぶへびだった。

入門講座を終了し、桂三枝師匠に「大川亭ひろ絵」という高座名をいただく。絵描きなので、「絵」をつけてもらった。これはちょっと自慢。

月○日

このとこ週末はずーっと長谷川は北海道やら九州やらに講演に出掛けている。子どもたちも成長して家族で鍋をやる回数も減った。「あおきさんも長谷川さんに付いて行けば？おいしいもんも食べられるし、いい温泉にも入れますよ」とある人にいわれるが、わたしは、そんな大作家先生の講演旅行に同行する愛人みたいなことは絶対しない。昔、そんな映画があったっけ。講演中、部屋で待ちながら悲しくなるに決まっている。おいしいもん&温泉にもあまり興味がない。家で留守番して、柴犬のチャイとまったりしながら仕事をする。ラフかなんか描きながら、買出しのメモをとり、夕方チャリンコでスーパーへ走る。中華鍋でジャージャー炒め物をしてしながら電話で真面目に打合せもする。絵本のタイトルを変更してくれという、タイトルは重要なので変更したくない、これがいちばんいいと思ってつけているので、これ以上いいのも出てこない、、、しばしやり合った挙げ句、タイトルは向こうのいいなりになる。いきなりテンションが落ちて、描く気がなくなる。でもプロなんだから、それでも描かねば。夕方は、なぜか電話が多い。長谷川も今、講演先に付いたと電話がはいる。この頃えらく痩せて、ご飯をあまり食べないのでほんとうに身体が心配だ。いつまでそんなに頑張るんだろうか？

電話がまた鳴る。ため息。「長谷川は留守です」

お知らせ

◎絵本関係展覧会情報

●安曇野ちひろ美術館

〒399-8501 長野県北安曇郡松川村西原
0261-62-0772, 0261-62-0774(Fax)

<http://www.chihiro.jp/azumino/>

【展示】〈香月泰男生誕 100年記念〉ちひろと香月一母のまなざし、父のまなざしー

11.9.16(金) - 11.30(水)

【企画展】〈出版記念展〉ー三国志はおもしろい!ー中国の絵本画家于大武(ユー・ダーウー)展

11.9.16(金) - 11.30(水)

●ちひろ美術館・東京

〒177-0042 東京都練馬区下石神井 4-7-2
03-3995-0612, 03-3995-0680(Fax)

<http://www.chihiro.jp/tokyo/>

【展示】ちひろの白

11.10.26(水) - 12.1.29(日)

【企画展】谷川俊太郎と絵本の仲間たちー堀内誠一・長新太・和田誠ー

11.10.26(水) - 12.1.29(日)

●射水市大島絵本館

〒939-0283 富山県射水市鳥取 50
0766-52-6780, 0766-52-6777(Fax)

<http://www.ehonkan.or.jp/>

【展示】なかやみわ 絵本原画展

11.10.1(土) - 11.29(火)

●ワイルドスミス絵本美術館

〒413-0235 静岡県伊東市大室高原 9-101
0557-51-7330, 0557-51-7331(FAX)

<http://www.metm.co.jp/>

【企画展】ワイルドスミス生誕 80年 特別企画

ワイルドスミスの青い鳥

10.11.11ー

●安野光雅美術館

〒699-5605 津和野町後田イ 60-1
0856-72-4155, 0856-72-4157(Fax)

<http://www.town.tsuwano.lg.jp/anbi/anbi.html>

【企画展】旅の絵本 IV(イタリアから 15点)

11.9.9(金) - 12.7(水)

【企画展】繪本仮名手本忠臣蔵

11.9.10(土) - 12.8(木)

●軽井沢 絵本の森美術館

〒389-0111 長野県北佐久郡軽井沢町風越公園 182
0267-48-3340, 0267-48-2006(Fax)

<http://www.museen.org/ehon/index2.html>

【企画展】四季のえほん展~自然を愛した絵本画家たち~
11.10.7(金) - 12.1.9(月)

●国立国会図書館 国際子ども図書館

〒110-0007 東京都台東区上野公園 12-49

03-3827-2053(代表), 03-3827-2069(音声案内) 03-3827-2043(Fax)

<http://www.kodomo.go.jp/index.jsp>

【企画展】ヴィクトリア朝の子どもの本: イングラムコレクションより

11.10.5(水) - 12.25(日)

●絵本美術館&コテージ 森のおうち

〒399-8301 長野県安曇野市穂高有明 2215-9
0263-83-5670, 0263-83-5885(Fax)

<http://www.morinoouchi.com/index.html>

【企画展】心にしみいる詩と挿絵展

11.9.16(金) - 11.15(火)

【企画展】『雨二モマケズ』絵本原画展

11.11.18(金) - 12.1.17(火)

●飛騨絵本美術館 ポレポレハウス

〒506-0205 岐阜県高山市清見町夏蔵 713-23
0577-67-3347(Tel, Fax)

<http://www.porepore-house.com/>

【常設展】田島征三 原画常設展示 さよならぼろ

11.3.15(火) - 6.20(月)

【企画展】北村月香「ラバンと赤いふうせん」展

11.10.1(土) - 11.30(水)

【企画展】ケート・グリーンウェイ原画展「ポップアップ繪本」展

11.12.1(木) - 12.25(日)

●小さな絵本美術館 八ヶ岳館

〒391-0081 長野県諏訪郡原村原山
0266-75-3450, 0266-75-3460(Fax)

<http://ba-ba.net/cms>

【企画展】生誕 100年記念

フェリックス・ホフマン展 ー前期ー

11.9.10(土) - 11.28(月)